

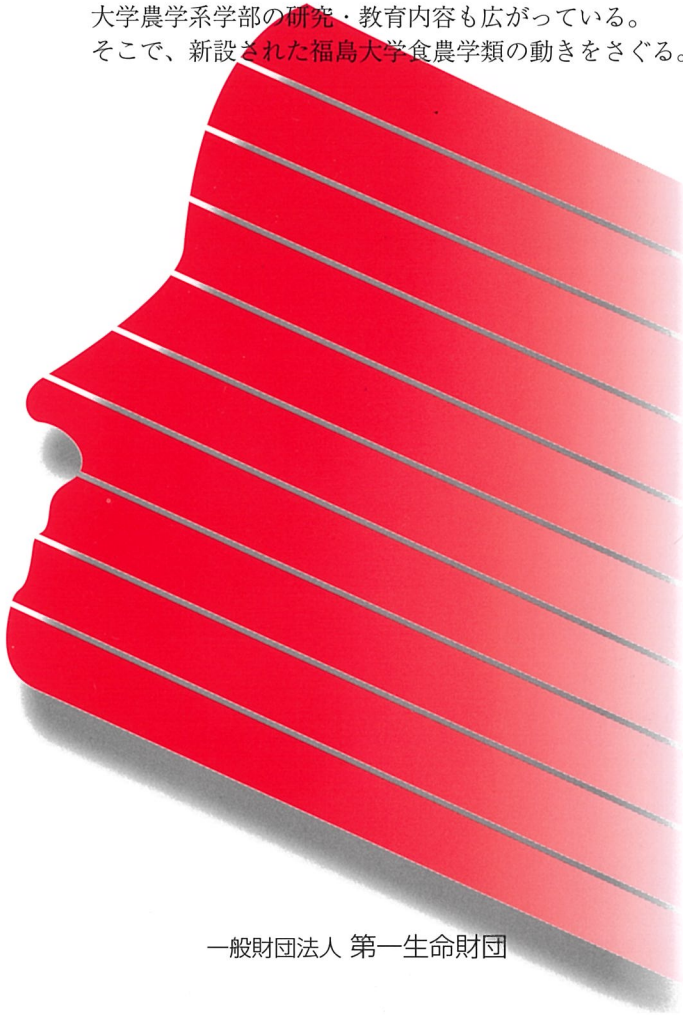
The ^{コミュニティ}Community

●特集

農と食と 地域を育てる

2022 | NO. 169

今、「農」と「食」への関心が高まっている。
大学農学系学部の研究・教育内容も広がっている。
そこで、新設された福島大学食農学類の動きをさぐる。



レバノン・ベイルート ～文化とアートの底力

写真・文 杉田聖子 ◆ すぎたせいこ

ベイルートの町なみ 内戦
前は中東のパリといわれる
ほど華やかな街だった。



1975年に始まったレバノンの内戦は1万平方キロ（岐阜県サイズ）の小さな領域で15年間も繰り広げられた。欧米や近隣アラブ諸国の政治地理的な意図に操られ、したたかに操りながら、レバノン人は内戦を生き抜いた。内戦後は、それなりの復興を遂げてきたが、2019年世界銀行のレポートに「19世紀半ば以来三本指に入る深刻さ」と揶揄される近年の経済金融危機には、祖国を不死鳥と自負するレバノン人もさすがに疲労困憊の色を隠せない。それでもレバノンのレジリエンスを信じる





ダマスカス街道 内戦時はグリーンラインといわれ、イスラム教徒とキリスト教徒が住む地区の境界になっていた。



ベイルート・アメリカン大学 1866年に設立され、アラブ世界の政治家や研究者、ビジネスリーダー、文化人の多くを輩出している。



アントワン書店 ベイルートのハマラ通りに店を構える老舗書店。多言語な商品を揃える。

理由の一つに彼らの文化度の高さがあげられる。

レバノンの首都であり、世界中でも最も古い都市の一つとされるベイルートは、長きにわたって、地中海の交易の中心地であり続けた。内戦前は金融、観光、娯楽で潤い、アラブ世界の知的活動の中心的な役割を果たし、中東のパリといわれるほど華やかな街だった。18もの宗教コミュニティが共存するこの国の多元性は、たかが20平方キロ（東京都港区サイズ）のベイルートにも反映されている。

1866年に設立された名門ベイルート・アメリカン大学は、アラブ地域でも無二の学問の自由を語り、宗派を問わず、アラブ世界の政治家や研究者、ビジネスリーダー、文化人の数多くを輩出してきた。その有力なOB・OGネットワークは世界120か国に広がっている。

第一次世界大戦後から第二次世界大戦後の20年間、レバノンにはフランス委任統治領であったため、今日でも政治、経済、文化のすべてにおいて、フランスとの結びつきが強い。そのため英語はもとより、仏語が母国語のアラビア語以上に上手なレバノン人は多い。1933年に創立されたアントワン書店は中心街のハマラ通りに店を構える老舗だが、そんな多言語社会のニーズに応える新刊書のセレクトの質は高く、三か国語を操るレバノン人の文化度のバロメーターともいえるよう。

現在ソデコ広場からベイルート国立博物館を結ぶダマスカス街道の始めは、内戦当時グリーンライン



映画「西ベイルート」のシーンを描いた壁画 映画は宗教をこえた高校生の友情がテーマとなっている。



文化センター「ベイルートの家」 外壁には銃弾の跡が残り、内戦の記憶を刻む。

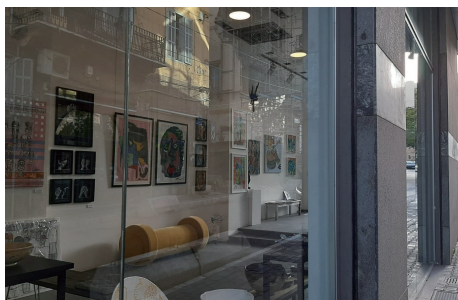


「記憶の木」 レバノン飢饉で亡くなった犠牲者を追悼する記念碑。高さが8m ある。

といわれ、イスラム教徒の住む西ベイルートとキリスト教徒の住む東ベイルートを分断していた。その街道沿いには、内戦の記憶を平和の礎とする文化センター「ベイルートの家」がある。その外壁にもスナイパーから浴びせられた銃弾の跡が生々しく残されている。また、現在はフランス大使館、イエズス会系のサンジョセフ大学のビルが並ぶ並木のきれいな住宅地には、若手画家兼活動家ヤザン・ハラワニーの作品を二点眺めることができる。1990年にヒットした映画「西ベイルート」では内戦中の宗教コミュニティをこえた高校生の切ない友情を描いた。その青春ものストーリーのワンシーンを描いた壁画がある。今でも自由な市民結婚は制度として認められておらず、宗教をこえた愛の成就是難しい。

もう一つは、8mの高さの鋼でできた「記憶の木」だ。薄茶色の葉はアラビア語文字が連なっているが、これは1915年から1918年におきた飢饉での2万人にも上る犠牲者を偲ぶ詩を再現している。なかでも有名な作家ハリル・ジブラーンの鎮魂歌「Dead Are My People」は、2020年8月のベイルート港大爆発事故で多くを失ったベイルート市民の心に響く。

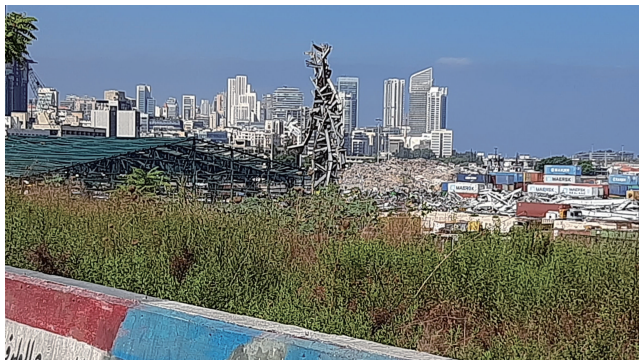
この大惨事から4カ月後、今だ瓦礫が山積するアシュラフイーエ地区のアウディエ美術館では「傷ついたアート」と題する展示会が行われた。以前より日本の「金接ぎ」の精神に共感していた地元銀行のオー



ペイルートの町中にできたアートギャラリー 不況がつづく中でも、アートビジネスは堅調にのびている。



古い家を改築したアートホテル 国内外のアーティストを迎えて作品を共有する場となっている。



ナデイム・カラムの像「Gesture」
写真中央に見える銅の塊が、その作品。小さな花を差し出す人を表しているという。

ところどころで昨今の不況の中、記録的に潤っているビジネスはアートだ。銀行や不動産よりも確かな投資として、国内有数のアーティストの作品は一気に価値を上げた。市内には、雨後の筍のごとく、新しいギャラリーが何軒も店を構えた。

刑事責任、政治責任、遺族へのまた被災家屋への補償等、痛ましい事故は何も解決していない。その港の真向かいに、東京大学で建築を学んだ彫刻家のナデイム・カラムが、小さな花を差し出す人を表した銅の像を作った。瓦礫から材料を、世界中のレバノン人からサポートをかき集めたこの作品には、きつと甦るといふ希望が込められている。

ナーが音頭をとり、破損したアートを金ではなく光で「接いだ」。惨事を題材にしたアート、修復され生まれ変わったアートを通じて、市民が傷を受け入れつつ、前に進まんとするセラピーとなった。

さらに被害の大きかったジャマイゼ地区に位置するアートハウスにも復興への熱い思いを見ることができ。元金融マンのオーナーが祖父から受け継いだ4階建ての石造りの古い家を、高級ブティックホテルに改築した。国内外のアーティストを迎え、作品を作り出し、共有する場を提供している。手入れの行き届いた中庭にはアーティストや泊り客でなくても利用できるレストランがあり、若手ジャズ歌手のデイナーショーは早くから予約一杯になる。週末、オーガニックで良質のランチをいただいていると、まるで田舎の別荘でエネルギー補充しているかのようだ。

ところで昨今の不況の中、記録的に潤っているビジネスはアートだ。銀行や不動産よりも確かな投資として、国内有数のアーティストの作品は一気に価値を上げた。市内には、雨後の筍のごとく、新しいギャラリーが何軒も店を構えた。

【新連載】
緑と暮らす

渡里湧水群を活かす会

茨城県水戸市渡里町

渡里湧水群（水戸市渡里町）
耕作放棄された田んぼを利用し
た親水池。谷地に沿って遊歩道
を付けた。（2022年5月撮影）



茨城県水戸市の中心街から車で15分ほどの住宅街に隣接して湧水が豊かな谷地がある。この湧水は古くから生活・農業用水などに利用されてきた。昔は子どもたちがどじょう捕り、トンボとりをして遊んだ場所でもある。ところが、湧水があまり利用されなくなるにつれて藪が生い茂り、立ち入るのも難しい状況になっていた。

そこで付近の住民たちが昔の谷地の自然を取り戻したいという思いから、2014年6月に「渡里湧水群を活かす会」を立ち上げた。

同会は、ここが水戸市民の憩いの場となり、さらには地域づくりに繋げたいという思いを目標に活動を続け、今年で9年目を迎えている。2021年10月には、公益財団法人都市緑化機構の「緑の都市賞」（特別協賛・第一生命財団）の内閣総理大臣賞を受賞した。

連載「緑と暮らす」の第一回として、この緑地を取り上げる。



親水池付近 池の土留めには伐採した竹を利用している。また、遊歩道には竹を砕いたチップを敷き詰めてクッション性を高め、歩きやすくしている。右上が遊歩道に敷かれている竹チップ。



ホタルの水辺 専門家の指導を受けてホタルの幼虫が住める流れを整備した。初夏には飛び交うホタルの火が見られる。ホタル以外にも、湧水群の水辺では、沢ガニやサンショウウオの卵（写真右上）、オニヤンマ（写真右下）などの生き物が見られる。



渡里湧水群にある7つの湧水ポイント 湧水から親水池やホタル池などへ水を引き込んでいる。その湧水の名前は、「延々と途絶えることなく湧き出していることへの感謝」「語り継がれてきた場所の愛称」「湧水の特徴」などを反映して、会で命名した。

①出水（すい）

②坂下の泉

③サンパチ山の湧水

④古道の泉

⑤滝

⑥光の泉

⑦一盛長者の湧水



会の活動拠点付近 毎月第2日曜りと第4水曜日を「湧水の日」と定めて活動が続いている。日曜日は参加者が30～50人と多く集まり、なかには茨城大学のボランティアチームも参加している。主な活動内容は、設立当初から続く竹林の伐採や雑草の除去のほか、水辺空間や遊歩道の整備・管理などがある。活動面積は約5haで、谷地に沿って付けた遊歩道の全長は750mある。



遊歩道の整備 人が足を踏み入れられないほど生い茂った竹を伐採している。



池の土留めの設置 伐採した竹を切り、池の土留めとして利用してる。



活動後の反省会 参加者全員で焼き芋や豚汁を食べながら意見交換などを賑やかに行っている。

The Community

コミュニティ

2022/No. 169

一般財団法人 第一生命財団

●世界の街から
レバノン・ベイルート～文化とアートの底力 杉田聖子 ————— 1

●緑と暮らす
渡里湧水群を活かす会 ————— 5

●巻頭エッセー
日本の医療保険制度に感謝 石井クンツ昌子 ————— 10

●特集
農と食と地域を育てる ————— 13

《座談会》
大学の農学系学部の新しい動き ————— 14

出席者／熊谷武久・深山陽子・藤野正也

司会／生源寺眞一

●一般記事
性差解析に注目するジェンダード・イノベーション 石井クンツ昌子 — 74

イランの新型コロナウイルス感染症パンデミック下に
おける献血の減少 細谷幸子 ————— 80

●連載
ボランティア ボランティアという連帯、連帯から生まれる変化
——ブラジルの事例 田村梨花 ————— 86

助成施設訪問 ひだまりの保育園（横浜市鶴見区） ————— 90

若者の風景 地域の課題に取り組み、実践的に学ぶ 中川実南 — 93

ブックレビュー ————— 97

日本の医療保険制度に感謝

石井クンツ昌子

いしい くんつ まさこ／お茶の水女子大学理事・副学長／一般財団法人第一生命財団評議員／『コミュニティ』編集委員



7月2日、講演のために岡山県へ向かう新幹線の車中で、突然、携帯のテレビ電話が鳴った。カリフォルニア州に住む娘がベッドに横たわり「無事産まれた」と言う。彼女は妊娠後期の高血圧症で、入退院を繰り返していたが、その日も血圧が高くなり様子をみるということで入院していた。出産予定日が8月17日だったので、約7週間も早く、それも入院した当日に出産となったことにまず驚いたが、産まれた子が1300グラムの低体重児であったことにも驚くと同時に心配をした。それから1ヶ月、色々なチューブにつながれた初孫は新生児集中治療室で少しずつ成長して、無事退院したときには体重が2590グラムと出生時よりほぼ2倍になっていて、今度は子どもの成長力に感動した。

さて、ここで触れたいのは孫がいかに可愛いだけではなく、お粗末なアメリカの医療保険制度についてである。私はアメリカ生活が約30年と長く、出産も子育てもアメリカで経験した。自身は昔の

ことはあまり思い出せない年齢になってきたが、子育て中に経験した医療や保険にまつわるフラストレーションはなぜかよく覚えている。乳幼児健診を予約しようとする度にほとんど1日中病院に電話をかけ続けてようやく予約が取れたこと、子どもが高熱を出してもアポが取れなければ医師に診てもらえなかったこと、交通事故で軽傷を負い1キロも離れていない病院へ救急搬送されたとき、私と娘で合計1400ドルの請求書が届いたこと、小学生の娘が体操を習っていて指の爪が剥がれてしまいすぐ救急医療センターへ連れて行ったが待合室で8時間も待たされたことなど、アメリカの医療や保険に関するホラーストーリー的な経験が多くある。

しかしこれらは30年以上前の話であるし、なんと言っても、2014年に施行された「オバマケア」と呼ばれる「医療費負担適正化法」で健康保険への加入が義務化されたので、アメリカの医療保険制度はかなり改善したと思っていたが、孫の誕生でそれは勘違いであることがよくわかった。

日本には国民皆保険制度があるが、アメリカでは「オバマケア」のような公的医療保険制度は、高齢者、障がい者、低所得者を対象にしたものである。例えばアメリカの公的医療保険としてメディケアとメディケイドがあり、前者は65歳以上の高齢者および障がい者が対象で、後者は一定条件を満たす低所得者が対象であり州によっても保険プランが違う。これらの条件を満たさない多くのアメリカ人は民間会社が提供する医療保険に加入するが、国勢調査によれば約8%が未加入と全員が入っているわけではない。サービス内容や保険料金も保険会社によってかなり違う。高額な保険料が払えず無保険者が増えており、また、医療費の未払いが原因の自己破産がアメリカの深刻な社会問題となっている。

カリフォルニア州で産まれた孫の話に戻るが、公的あるいは民間の医療保険でもまずは親の経済

状況などを含む色々な条件をクリアしないと保険に加入できない。また、保険加入の手続きに時間がかかりすぎる。孫が集中治療室を退院する際に、低体重児のために、1週間後に小児科を受診するように言われたが、医療保険に加入するのに退院してから1ヶ月半もかかったためにこの小児科でも健診の予約さえ入れてくれない。自費で医療費を支払うから診てくれと言っても予約は取れないのである。

アメリカの医療には自分で主治医を選べる制度があるメリットなどもあるが、これらの主治医は「Family physician」と呼ばれる内科の医師なので、例えば皮膚科、眼科、外科の専門医を受診したいとしても、まずはかかりつけの内科医から専門医を紹介してもらわなければならない。よって自分ですぐ予約できないし、受診までかなりの時間がかかる。

このように、かなり複雑で自己負担額が多いアメリカの医療保険制度と比較すると日本の国民皆保険制度の方が優れているのは一目瞭然である。8月にカリフォルニア州に滞在して、帰国後に耳の調子がよくなくて耳鼻科を受診したが、他の医師の紹介なしに近所の耳鼻科専門医に診てもらえることはよく考えとすごいことなのである。

アメリカ人の多くは生活習慣病について学び、ダイエットや運動に精を出しているが、ある意味このような病氣予防をしながら健康に生きていかないと医療的にサバイブするのがむずかしい国だからである。日本では保険証があれば、いつでも誰でも必要な医療サービスを受けることが可能である。我々にとっては当たり前のこともかもしれないが、アメリカと比較するとかかなり恵まれている。このような日本の医療保険制度に感謝するばかりであるが、家族がアメリカに住む私にとっては複雑な気持ちもある。とにかく孫が健康に育つように祈る毎日が続く。

特集

農と食と 地域を育てる



大学の農学系学部の新しい動き

福島大学農学群食農学類の活動に見る

出席者（敬称略・発言順） 肩書きは座談会開催時のもの

熊谷武久 — くまがい・たけひさ／福島大学 食品科学コース（食品加工学）教授

深山陽子 — みやま・ようこ／福島大学 農業生産学コース（蔬菜・花き園芸学）准教授

藤野正也 — ふじの・まさや／福島大学 生産環境学コース（森林利用学）准教授

司会

生源寺眞一 — しょうげんじ・しんいち／福島大学 農業経営学コース（農業政策学）教授、

『コミュニティ』編集委員

近年、「農」また「食」が、有機農業、SDGs、食育と食品の健康志向、農村の暮らしへの関心などの面で新しい展開を見せている。およそ4年前に農学系学部を新設した福島大学も、従来の農学部ではなく農学群食農学類と称し、幅広い教育・研究内容をもつ。それは2011年の福島原発事故後の風評被害に苦しむ福島県内の農業団体や県、市町村などからの要請に応じて新設された学部でもあった。学生の教育面でも地域の農業者との交流が重視されている。



地域の要請に応えた福島大学食農学類の開設

生源寺（司会） 本日はお忙しいところ、お集まりいただき、ありがとうございます。

『コミュニティ』は全国の自治体等に送られている刊行物です。その『コミュニティ』で福島大学食農学類の開設の経緯や、開設後の動きについて特集していただくことになりました。特定の学類の設置について焦点を合わせることは、やや異例の形ですが、最近、福島大学に限らず、農学系の学部をつくる動きがかなり活発に続いていると思います。あちこちで農学系の学部ができている状況です。そんな中で福島大学食農学類は、地域社会からの非常に強い要請を受けて開設するに至ったという経緯があります。

その要請の背景には、東日本大震災の原子力発電所の事故からの復興という課題がありました。東日本大震災は2011年3月11日に起きました。その2年後くらいから「福島大学に農学系の学部をつくってもらいたい」という県内からの声が届き始めました。具体的には農業団体や農業関係の組織、県議会、さらには福島市といった自治体などからも声が上がってまいりました。

東北6県は農業県であり、林業県でもあります。それで各県の国立や県立の大学に農学系の学部があるのですが、福島県は例外でした。福島県は農学系学部の空白地帯だったので、もともと農学部をつくってほしいという声はなくはなかったのですが、震災と原発事故をきっかけに非常に強い声となったのです。2014年から福島大学内で具体的な検討を始め



右から藤野正也、熊谷武久、深山陽子、生源寺眞一の各氏。

て、2015年からは設置に向けた準備を本格的に進めてきたという経緯があります。

福島大学食農学類は、国立の農学系の学部としては、おそらく一番小さいグループだと思います。学生定員が1学年100人、専任教員が38人の小さな学部です。だからと申しましようか、小さいなりに特徴のある教育と研究を進めていきたいというのが教職員の共通の願いなのです。食農学類の特徴については、のちほど、みなさんと一緒にいろいろ議論したいと思います。

学生について申しますと、2019年4月に食農学類が開設されて、すでに4期生まで入学しています。したがって、最初の入学生が来年、2023年3月に卒業して社会に巣立っていくという状況です。

興味深いことに、学生の男女がほぼ同数です。これまで4回の入試のうち2回の合格者は男女が完全に同数でした。今年4月の入学試験では53人对53人でした。これは一つの特徴と言っているかと思えます。意識的に入試の採点を操作したわけではありません。結果的にそうなっているということです。

学生についてはもう一つ、県外の高校の出身者が6割以上です。県内から非常に強い要請があつて誕生した農学系の学部なんですけれども、県内からは3割台という状況で、これは当初の想定とはちよつと違ったところかなと思っております。ともあれ、北関東、東北を中心に県内外の広い範囲から学生が集まっている状況です。

教員は、38人のうち5人は学内での異動で食農学類に所属されています。残りの多くは公募を基本として、全国から手をあげていただいての選考の結果、着任されています。教員の





司会 生源寺眞一 氏

福島大学食農学類農業経営学コース（農業政策学）教授。『コミュニティ』編集委員。1951年愛知県生まれ。東京大学農学部を卒業後、農林水産省農業試験場研究員、東京大学教授、名古屋大学教授などを経て、2017年より福島大学教授。これまでに東京大学農学部長、日本農業経済学会会長、食料・農業・農村政策審議会会長などを務める。

近年の著書に『日本農業の真実』（ちくま新書）、『農業と人間』（岩波現代全書）、『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる』（家の光協会）などがある。

出身大学は北海道から鹿児島県までの広範囲で、それぞれの経歴にもかなりのばらつきがあります。また、これまで大学で教育・研究に従事されていないタイプの教員の割合が比較的多いのも、食農学類の特徴です。今日の座談会に参加していただいたお三方がまさにそういった広がりのある教員です。

教員についてもう一つ申しますと、女性の教員が38人中5人という状況です。学生が男女半々ということからしても、女性教員の人数と割合を増していくことが今後の課題かなという気がしております。

以上、ほんとうに雑駁（ざつぱく）ですけれども、食農学類の開設の背景と、学生・教員の概要について紹介させていただきました。



福島大学農学群食農学類「教育の特色」（公式サイトより）

本学類は、「実践性」「学際性」「国際性」「貢献性」の4つの学類共通のディプロマ・ポリシーを掲げています。ここではこれらのディプロマ・ポリシーと教育の特色について記しています。

1) 実践性を重んじる教育

本学類の教育では、各科目の専門性を十分に高いレベルで確保すると同時に、その内容が農林業・食品産業・地域社会の具体的な課題と結びついている点について、学習の初期段階から伝えることにする。この点を考慮し、農場などでの実習（科目名は「農場基礎実習Ⅰ・Ⅱ」）を1年次の前期・後期に配置する。



これは植物や動物や生産環境に直接触れる機会を早期に提供することで、実践的な農学への高い意欲の醸成と持続を図ることをねらいとしている。さらに、県内の農林業や食品産業の現場をフィールドとして、農学実践型教育（科目名は「食農実践演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」）を2年次後期と3年次配置する。課題に向き合う農学本来の教育理念を具現化するカリキュラムとなる。

2) 学際性を重んじる教育

本学類には生産環境・農林業・食品産業・消費者の連鎖であるフードチェーンに対応するかたちで履修コースが設けられる。また、履修コース自体も多彩な専門分野から構成されており、具体的な課題に取り組むに際して、専門分野は相互に意識的かつ緊密に連携する必要がある。フードチェーンの連鎖総体の成果の向上には、異なる専門領域による高レベルのチームワークが決定的に重要だからである。この点を考慮して、1年次からの「農学リテラシー」の科目群には学際性を重視したオムニバス講義や初学者にも理解しやすい入門的・概論的な講義を配置し

【ディプロマ・ポリシー】

各大学、学部・学科などの教育理念に基づいて、どのような力を身に付けた学生に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針で、学生の学修成果の目標となる。

ている。また、前述の農学実践型教育では、1 班につき 15 名程度の受講生と 4 名程度の担当教員はいずれも履修コース横断型で構成する。この点も学際的な理解力と発信力の涵養に配慮したことによる。なお、本学類の専任教員は原則として全員が農学実践型教育を分担する。

3) 国際性を重んじる教育

農学の最新の科学的知見はグローバルに共有されている。履修コース別の専門科目では最新の知見を丁寧に解説するとともに、国際経験豊かな教員の講義や演習を中心に、農林業や食品産業の国や地域による特質を具体的に伝授する。加えて、グローバルな問題意識の涵養のためには、地域の個性的な食品や伝統的な慣習の背後にある国境を越えた普遍的な要素を学ぶことも大切である。専門分野を例示すれば、自然科学の領域では地域の名品を支える発酵・醸造学があり、社会科学の領域では各国に共通する共有資源管理のロジックを学ぶ農林資源経済論がある。さらに、本学類の教育研究は直接・間接に震災・原発事故からの復興の取組とつながっている。復興の歩みが国境を越えて語り継がれる挑戦であることも、地域の具体的な課題を素材とする教育研究を通じて、本学ならではの国際感覚として学生と教職員に共有されることになる。

4) 貢献性を重んじる教育

震災・原発事故からの復興の歩みの中から、あるいは技術・経営の革新的要素の普及の中から、各地で農林業・食品産業・地域社会の新たな潮流が生まれている。復興の歩みのもとで、本学類の教育研究による息の長い貢献が自然科学・社会科学の両面から求められている。震災とりわけ放射能汚染の問題については、多くの科目が関連する知見を伝授することになるが、早期の段階で復興に向けた俯瞰的な講義も配置する（科目名は「震災農村復興論」）。さらに本学類には、産業と社会の新たな潮流の先導者もしくは後押し役としても多くの期待が寄せられている。この点をカリキュラム編成に反映したのが、すでに紹介した履修コース横断型の農学実践型教育であり、課題の特定・分析から解決策の提案に至る現場との緊密な交流のもとで、地域の産業や社会への貢献意識を高める学びの機会を提供する。本学類開設当初は、市町村・農林業関係団体・関連企業等との連携により、7 か所程度のフィールドを対象とする。

川上から川下まで4つの専門コース

生源寺 福島大学食農学類の専門コースは、食の流れに沿って、川上から川中、川下という形で構成されています。

川上は生産環境学コースです。このコースでは森林科学、農業用水、農業用の機械などについて学びます。

川中は農業生産学コースです。伝統的な農学分野のコアの部分と言っていいかもしれません。栽培、育種などをいろいろな品目について学びます。



熊谷武久 氏

福島大学食農学類食品科学コース（食品加工学）教授。

1964年新潟県生まれ。新潟大学農学部卒。同大農学研究科修了。1989年大手食品会社に入社し、研究開発部門に従事。2019年より福島大学教授。専門は食品微生物学、食品加工学、食品機能学。

さらに川下には食品科学コースがあります。農産物やキノコなどの林産物を食品に加工し、それらを販売することも含めて学びます。じつはこの分野の教員の割合が全体の4分の1以上です。これも食農学類の一つの特徴と言っているかと思えます。

そしてもう一つは、私が属している農業経営学コースです。

経営学と言うと「ああ、川中の農業経営だね」という感覚で受け止められがちです。もちろん、その分野の先生もおられますけれども、食の流れをつなぐマーケティング、流通、あるいはフードシステム論といった観点からアプローチしている先生が比較的多いのです。ですから、川上、川中、川下、そして食の流れの全体をつなぐ専門コースの構成になっているわけです。

では、みなさんから、自己紹介をお願いできればと思います。専門コースと福島大学での教育・研究の特徴的なこと、そのほかのことでもけっこうです。

最初に、一番川下にあたる食品科学コースを担当されている熊谷先生からお願いいたします。

熊谷 私は30年間、日本でせんべいを一番多く作っている民間の会社で研究開発をやっていました。私の教育領域は食品の加工ですけれども、専門は植物由来の乳酸菌の研究です。民間にいたので、研究だけではなく商品までもっていくことをやっていました。

業務用の乳酸菌として、いろいろな商品に私の研究した乳酸菌が使われています。当時の業務としては乳酸菌の研究をするだけではなく、その生産をして、損益計算をして、業務用として研究者に売りに行く、アピールしに行く。研究をビジネスへ持って行くということを





深山陽子 氏

福島大学食農学類農業生産学コース（蔬菜・花き園芸学）准教授、附属農場長。

1968年静岡県生まれ。千葉大学園芸学部園芸学科卒業、同大学修士課程修了後、神奈川入庁。病虫害防除所で4年間植防関係業務に携わった後、試験研究機関である農業技術センターに配属され、主に野菜・花き栽培や農作業に関する研究を20年間行った。その後、政策局政策部総合政策課科学技術グループに異動。福島大学には学類開設1年前の2018年に着任。専門は施設園芸。

やっていました。

ですから、研究をメインにしている人よりは研究分野の最先端はできないところがあるかもしれませんが、それでも、それを具現化するところが強いのではないかと。ちょっと手前みそですけれども、そう思っております。

生源寺 つぎに食の流れの川中になります農業生産学コースから、深山先生、お願いいたします。

深山 農業生産学コースで蔬菜・花き園芸学を担当させてもらっている深山と申します。蔬菜・花きは、たぶん、一般にはあまり使われない言葉だと思うんですけども、蔬菜は野菜のことで、花きは花のことです。



園芸学には蔬菜・花き、それと果樹があります。「囲んだところで育てる」というのがともとの意味なんですけれども、「限られた土地で収益性の高いものをつくる」というのが園芸学の特徴になります。

私は食農学類を開設する1年前から福島大学に来ておりまして、農場の準備、学類の授業が始まる前の準備から携わらせていただきました。

私の研究は栽培がメインです。野菜や花は栽培技術を高めることが収益につながっていくところが多くあります。逆に栽培技術が確立していないと収益に結びつきません。ですから、まず栽培技術を確立させるために、いろいろな課題に取り組んでいます。

とくに最近では、異常気象だとよく言われます。昨日まで涼しかったのに、今日は急激に暑くなる。そういうことが非常に頻発しております。

こうした気象を「極端気象」と呼んだりしているんですけども、それに野菜などの作物が対応できなくて、いろいろな生理障害を起こす頻度がすごく上がっているんですね。現場でも生理障害の発生が非常に多くなって、まだ対応技術もなく、かなり収益を落としている事例があります。

たとえば今年のトマトで言いますと、夏の急な気温上昇で花が落ちてしまい、実がつかなくなってしまうことが、かなり問題になっています。そうすると、11月初旬の値段が一番いい時期に出荷できなくなってしまうんですね。そういうことに対応するためにはどうしたらいいかという基礎的な研究をさせていただいています。

私は千葉大学園芸学部を出ていますが、恩師のさらに恩師の方で、90歳代まで元気だっ





藤野正也 氏

福島大学食農学類生産環境学コース（森林利用学）准教授。

京都府出身。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。博士（農学）。民間コンサルティング会社、京都大学農学研究科特定研究員、山梨県富士山科学研究所研究員を経て2020年4月に福島大学へ着任。専門は森林利用学、林業経済学。

た三原義秋という先生がいました。その先生が常々弟子たちに言っていた教えに、「研究課題は農家の庭先で見つけなさい。その研究の成果は世界に発信しなさい。そして世界の研究者に尊敬されるような研究をして、農家からは感謝されるような研究をしなさい」という言葉があります。

それを三原先生の弟子である恩師から私は聞いています。でも、弟子の弟子として、その言葉を意識しながら日々研究を行っています。

そして、いま私もその言葉を同じように学生に伝えています。

ただ、昔と違って、いまの農業はいろいろな課題が複雑化してしまっていて、農家の庭先から課題を見つけることもすごく難しくなっています。昔みたいに食糧増産、品質向上とい

【三原義秋（1915～2013）】

千葉大学園芸学部教授、同附属農場長を経て1980年に定年退職。故郷の鹿児島で「千年の森」事業を開始。著書に『農業気象』『九十歳、山守の遺言―森の健康と人の健康』などがある。

うだけではない。ある農家さんはこう言っている、別の農家さんはこう言っているようにニーズがいっぱいあります。これからは、そうしたことに対応する力が必要になるんだよ、と授業や実習のときに学生に伝えていきます。

生源寺 それでは、食の流れの川上にあたる環境、資源といった領域で、とくに森林科学を専門とされている藤野先生、自己紹介をお願いいたします。

藤野 生産環境学コースの藤野ですが、経歴はかなりややこしいです。

出身は京都大学で、大学院は生物資源経済学専攻です。福島大学で言うところの農業経営学コースにいました。

私の専門は林業の経済学です。京都大学大学院は博士課程までいきました。

私の師匠は、研究室の先輩にあたるのですが、統計学を専門にしていました。その師匠は、最初の就職先が我が国唯一の畜産系大学である帯広畜産大学で、その次が我が国唯一の園芸学部である千葉大学園芸学部でした。そのため、「取り扱う対象が違ってもデータになつてしまえば統計学の世界になるので、そういう万能ツールを身につけなさい」と言われ統計学を教えてもらいました。

ただ、「藤野君のすばらしい博士論文が出来上がるのを楽しみに待っている」というのがその先生の指導方針でした。先生も定年退職するし、博士論文が出来上がらず、いわゆる年限がきてしまったので、仕方なく就職することになったんです。

どうしようかなと考えたところ、流通で言う一番川上側（生産側）の研究をしていたので、川中、川下という流れがあるなかで、もうちょっと下流のことも知らないといけないだ



ろうと思い、マーケティングのコンサルティング会社に就職しました。

そこは、いまで言うところビッグデータを扱っている会社で仕事内容は大変楽しかったんです。ただ、ブラックな会社でした。入社して2年ぐらい経った頃、自分が学生時代に研究していたテーマが国の政策に取り入れられ、私が調査していた森林組合がそのモデルとして取り上げられたんです。私の成果ではないのですが。

いつかは林業界へ戻ってこようと思っただけなんです、このテーマが全国的に政策として広まっていくならこのタイミングだろうなと思ひまして、林業の経営コンサルティング会社に入れてもらいました。

林業の経営コンサルティング会社と言っても、社長さん一人だけの個人事務所なので、私自身もほぼ個人営業的な感じでした。そこも3年ぐらいで独立して、そこから先はずっと個人経営でやっております。いまなお私のメインの仕事は経営コンサルティングの仕事です。と言っても、林業の人材を育成する研修会の先生というのが、いまのメインかなと思います。

ただ、研究するのも大好きなんで、働きながら博士号を取り、研究も民間にいる間にも行いました。

そうした感じで研究を続けていたんですが、もう少し研究をやりたいなという思いと、先ほどお話しした林業の人材を育成する研修会の仕事が減ってきたというのもあって、博士号を取ったときの先生のところへ相談に行き、ポスドクとして京都大学に戻ってきました。

その次に山梨県にある山梨県富士山科学研究所という県の試験場でポスドクをしていたところ、福島大学の募集があって、応募してやってきたという次第です。

【ポスドク】

「ポスドクター」の略。博士号を取得したのち、大学や研究機関などで研究活動をするスタッフ。「博士研究員」とも言う。

コンサルティングと研究で、いまで言うところ二刀流みたいなものかなと思っています（笑）。
森林の話はまだしていませんが、だいたい自己紹介はこんな感じです。

生源寺 どうもありがとうございます。お三方とも、食にせよ木材にせよ、その流れの川上から川中、川下、最後の消費の段階まで視野に入れた仕事をされてきていると思います。

食農学類で学ぶ学生たちの特徴

生源寺 先ほども申し上げましたように、食農学類の教員は公募を基本として、全国から手をあげていただいて、私が言うのもちよつと変なんですけれども、フェアな選考をしたつもりです。それぞれがかなり異なるキャリアを持ちながら福島大学に来られています。

そこで、とくに学生の意欲とか学生と接してみても印象を中心に、感じておられる福島大学の特徴をお話いただければと思います。みなさんはこれまでは大学で教育を行うお立場ではなかったので、ご自身の学生時代のことを思い返したりしてお話いただければと思います。

熊谷 最初に着任した時から学生が私によく声をかけてくれるなど、そんな感じがありました。

藤野 熊谷先生は人気ですから。

熊谷 いえいえ、そんなことないですよ。私は食品科学コースなので農場がメインじゃないんですけれど、農場実習を手伝いに行っても、非常に気軽にいろいろと声をかけてくれた



りして、学生と教員の垣根がわりと低いという印象がありますね。昔の教授様とか、そういった雰囲気じゃなくて……、すごい親しげに接してくれるという感じがありました。

深山 それは私も学生から聞きますね。ほかの学類の学生としゃべっていて、「あつ、じゃあ、それ先生に聞いとく」とか言うのと、「えーっ」と言われるって。ほかの学類の学生は、先生たちとそんなにしゃべったことないと言っているみたいです。

熊谷 それって食農学類の先生の特徴なのかな。

藤野 そう思いますよ。いわゆる教授様みたいな感じの偉そうな人はいないですよ（笑）。

熊谷 自分が受け持っている基盤教育の1年目の教科で、ステージの上で多糖の結合様式をからだで表すために、食農学類の学生を登壇させました。そういうこともあってか、「先生は、すごい垣根低いですね」みたいな感じで言われて、「そうかな」って思うこともあります。私はふつうにやっているだけなんだけど。学生から来てくれると、すごい接点に近いなという感じがします。

深山 それに食農学類の学生はとても意欲的ですね。

もともと新しく開設された学部へ入ろうという意欲がある学生だからだと思いますけれど、農林サークル福桃^{フイタモ}とか、食農^{シノク}のサークルとかをつくって自分たちで活動したり、なかなかすごいなと思いますね。

生源寺 農林サークル福桃は令和元年（2019）にスタートですから、もう初年度にできていますね。

深山 自分たちでマネジメントして、サークル活動として地域の農家さんのところへ手伝





農林サークル・福桃（フータオ） 福島大学初の農学系サークルとして2019年9月に発足。おもに大学や福島県内での農林業、地域貢献活動などを行なっている。



福島大学食農学類
食農Caféサークル
おおたま村づくり株式会社



あだたらの里直売所
にて
お弁当企画第3弾

OPEN

ふくしま冬野菜の
きのこ弁当 ¥1000(税込)

2.26(土)
2.27(日)
11:00 AM まで

※売り切れ次第販売終了となります



食農Caféサークル 2020年、食農学類に所属する学生によって結成され、学類研究棟1階スペースなどを活用して、さまざまなイベント企画を実施している。写真上は、福島県大玉村にある「あだたらの里」という直売所で販売するお弁当づくりをするサークル員。左の写真は、そのイベントのポスター。

いに行つて、田植えを何回もやつたり、果樹の作業を一通りやることができたと言ひてゐる。」「農家さんがつくつた花に病氣が出たけど、どうしたらいいかな」と、私のところに相談に来たりすることもあつて、すごいなと思いますね。

熊谷 私も学生から「ジャムを作つて売りたいんだけど」という相談を受けました。「福島大学は加工食品をつくることはできても、問ひ合わせなどを受ける組織がないので販売者になるには難しくない？」と話しました。冗談半分で、「生源寺先生が長としてクレームとするわけにいかないでしょう」と言つたり（笑）。案として一括表示のほかに開発者で記載は可能と思うけどと言ひました。「農産物の加工面でも何かやろう。じゃあ民間の食品会社出身の先生がいるから聞いてみよう」といったように、物事を成し遂げようという非常に前向きな姿勢を感じます。

生源寺 じつは2020年からの新型コロナ対策で、とくにいまの3年生は、大学にも来られない状況が続いて、ほんとうに大変だつたんですね。ところが、お話にあつた農林サークル、食農のほかにサークルのほかにもいくつかサークルができてゐる。既存のサークルに加入するというケースはたくさんあるでしょうが、自分たちで新しいサークルをつくつてゐるんですね。ここがちょっと、ほかの学類、あるいはほかの大学とは違ふかなという印象を私ももつてゐました。

コロナでサークル活動ができないのが大学の実態だという情報があります。それは福島大学でも間違ひではないんですね。食農学類の場合には、自分たちでサークルをつくつて、先生方もけつこう支えておられるところがありますよね。



就職活動にも生かされる経験

生源寺 ところで、就職活動はどうですか。とくに4年生は最後の段階にきていますが、この問題への関わり方についてはいかがですか。

熊谷 私は民間企業で働いていた時に管理職をやっていたので、新卒採用の面接を担当していた経験もあるんですよ。私が民間出身だと学生はわかっていて、コースを問わず、エントリーシートを見てくれとやってくるので、いろいろアドバイスをします。もちろん、勤めていた会社のことを言うわけではなくて、経験に基づくアドバイスです。

エントリーシートでは、自己PRとか、いわゆるガクチカ（学生時代に力を入れたこと）が柱になっているわけですよ。そうなると、自主的にやっているサークル活動だったり、実践教育だったり、つまり時間をかけて力を入れたところはガクチカに書きやすい。そういうところが多くあるのも食農学類のいいところじゃないかなと思います。サークル活動自体は食農学類自体の活動ではないんですけど、大きく見て食農学類として実践性に近いところがあるんじゃないかなと思います。

生源寺 深山先生も神奈川県で農業技術面での職員を長年経験されて、最後は行政全体を眺めわたすようなポジションにおられました。学生の就職活動においてもかなりアドバイスをされていますよね。

深山 そうですね。先ほど自己紹介のときに申し上げるのを忘れてしまったんですが、私



は福島大学へ来る前は自治体の職員だったんです。神奈川県で25年間働いていまして、その25年のうち20年は試験研究機関にいました。

最後の1年は、県庁の政策局総合政策課ということで、科学技術政策を担当していました。農学部を卒業した学生が県庁へ新人で入ってきたときの新人教育をしました。ところが、農家を指導する立場で入ってくるのに、「農家としやべったことがありません」という新人がほとんどなんです。

「農場実習もやったことがないです」「土にもさわったことがありません」という人もいます。農家に連れて行ってもなかなかしやべれないので、そういう人たちが農家を指導できるようになるには時間がかかるんですね。もちろん、なかには経験がある人もいますが、ここ10年くらいは、そういう人は本当に少数ですね。

食農学類にも自治体職員になりたいという学生がけっこうな人数います。かれらが相談に来たときには、「あなたたちは農場実習や実践教育で農家の方々や地域の方々としやべったことがあるでしょう。サークルとかでも、いろいろ相談しながら活動したことあるよね、そういう経験をもつて採用試験を受ける人は少数だから、それを言ったほうがいいですよ」とアドバイスしているんです。

その経験を食農学類の学生はあたりまえの事だと思っていて、自分たちの特徴だと思っていないんですね。

熊谷　そうですね。

深山　私は学生には、「食農学類の学生は、農家と相談しながらこんな活動をしたという

【県試験研究】

地域に密着した産業の振興、県民の生活や健康、福祉、環境などの維持向上を図るための研究開発や、研究の成果を活用した技術指導、技術移転などを行う機関。

ことを自治体の面接で伝えたほうがいいよ。それはすごいアピールポイントだから、福島大学の特徴だから、ちゃんと伝えなさい」「それであなたが何をしたかをちゃんと伝えるようにしゃべりなさい」と言っています。

熊谷 企業では、いま、3年離職率がどうと言われているじゃないですか。最初のマッチングが大事だと思います。食農学類で土にさわるような経験をもっていて、それを文面とか口頭でしゃべっていると、採用する側も、マッチングのまず一步目は間違いないだろうと安心するかもしれませんね。そういう経験があるのは、就職先側というか、受け手側のほうにもアピールになっているのかなと感じました。

深山 そうですね。

生源寺 食農学類はディプロマ・ポリシー、人材養成の方針として、「実践性」を最初の柱にしているわけですね。「実践性」というのは、言葉で伝えても何の役にも立たないということ。まさに「土と接する」、あるいは「実際の課題と接する」という点では、それなりの特徴のある教育をスタートしたかなという感じはしています。

入学当初から農場基礎実習

生源寺 つぎに、食農学類の特色のあるカリキュラムということで、まず「農場基礎実習」について話していきたいと思います。

農場基礎実習で、学生たちはまだ初心者としてですけど、実際に森林の問題に取り組ん

【3年離職率】

2020年度における入社3年以内の離職者の離職率は、大学卒は31・2%、短大卒は41・4%、高校卒は36・9%、中学校卒は55・0%。（厚生労働省報告より）



でもらうこともあれば、食品の加工といった分野にも触れていますね。

何よりも、1年生の最初の学期から田畑で農場実習をする。しかも前期・後期の1年間で。学生のみなさんはあたりまえだと思っているかもしれないけれども、じつはあたりまえではないですね。ふつうは2年生、場合によると3年生から始める大学もあります。なかにはほとんど田畑での実習の経験なく卒業するケースもあるわけです。

それに、学生と学生のコミュニケーションに加えて、学生と教員のコミュニケーションの機会も農場基礎実習が提供していると思うんですね。多くの大学では、1年生の最初の学期は、いわば昔の教養部という感じで、大教室で大人数で聞いている座学が多いかと思います。しかし、1年生の最初はものすごく意欲が高いわけですね。その意欲を生かすことなく、だんだんしぼんでいくケースをわれわれもよく承知しているので、1年生の最初の学期から農場実習を行うのは悪くないと思っています。

農場基礎実習について、みなさん方の印象などを、課題も含めて、お話いただければと思います。まず、農場長の深山先生、いかがでしょうか。

深山 学生にとって農場実習は入学して最初に体験すること、しかも1年間やり続けるので、かなり印象に残っているみたいです。1年生の最後に実習の感想を書かせると、いま生源寺先生がおっしゃったように、コミュニケーションから学んでいることが多いみたいです。すね。

食農学類の農場基礎実習は、実際に作物を育てたり、畑で作業をしたりすることが多いんですけれども、最後は食品とか経営の分野の実習として、農場で作った野菜などの農作物の



ビジネスプランをたてて食品を分析したり、自分で食べた印象を書かせたりしているんです。「数値で見た結果と実際に食べた印象にはずれがある」ということや、「その時にいろいろなデイスカッションをしたのがすごく楽しかった」「ほかの人が何を考えているのかがすごく勉強になって、意見を聞くのはすごいおもしろかった」という感想を学生は書いていて、コミュニケーションから学んでいると感じます。

農場実習は近隣の農家さんにものごくバックアップしてもらっています。プロの農家から鍬の使い方とか、稲刈りをした時のはずかけの仕方を教わったことがある農学部生は、全国的にもほとんどいないんじゃないかと思いますが、うちの特徴だと思えます。1年生は18歳、19歳で、みんな鍬を扱うのが初めてで、最初はうまく使えないんですけど、練習をすることでできるようになると、うれしいんですね。学生時代の授業のなかでも、そういう体験はかなり印象に残るんじゃないかなと思います。

それに、育て方によって味も収益も変わることがわかるように、植え方によって稲の収穫量が変わったりするのを実体験として目で見て知ることが非常に重要です。実際に観察したことが、いろいろな学際性につなげていけるような形になっているのではないかと感じています。

コロナで実習がなかなか難しくなっちゃったいまの3年生には悪いんですけど、その3年生でもわずかな機会にいろいろ考えて、教員みんなで何とかやろうということが進められたんじゃないかなと思いますね。

【はずかけ】
束ねた稲を棒などに架けて約2週間、天日と自然風によって乾燥させること。



基礎実習で知る自然の楽しさ

生源寺 藤野先生の森林の関係は、農業に比べてタイムスパンが長い領域ですね。そういったなかで、実習で学生が森林に触れる取り組みもやっておられると思うんですが、いかがでしょうか。

藤野 農場基礎実習では、学生に「とりあえず木の名前を覚えましょう」と話します。

木の名前がわからないことには、ほかに何の話もできません。幸い食農学類には、金子信博先生という歩く樹木図鑑のような方がいます。

農学部では、どうしても田や畑などの圃場はじょうのなかの世界が中心になってしまいうんですけれども、生産環境学コースという、われわれのコースが扱っているのは、それ以外のすべての場所なんですね。面積的に言うと、それ以外のほうが多いわけです。

このコースの基礎実習で行っているなかで一番おもしろいのは、大学構内にある信陵公園を歩くこと。信陵公園は、ちよつとこんもりとした、山というほどでもない斜面ですけども、そこを歩くだけで、「キャーキャー」と大騒ぎになるんですね。ちよつとやぶが深いところへ、「じゃあ行きましょうか」なんて言うのと、さらに「キャー」つとなって、ディズニールンドに來たのかというぐらい大興奮になる。

農場はまっ平で作物だけに触れるというのが多いと思うんですけども、森林やその周辺の環境はそうじゃない。よくわからないものも文字どおり体験というか触れる。田舎に行っ



たら、クモの巣にひっかかるとか、そんなのあたりまえじゃないですか。学生って意外とそういう体験に反応するんだというのが感想です。

生源寺 それがスタートになって、2年生後半になると専門コースに入っていきますね。

藤野 2年生の夏休みの間に、「森林特別実習」という実習があります。これはコースに分かれる前に行う実習で誰でも参加できます。ですので森林に親しんでもらうことが目的ですが、欲を言えば、もっと知ってほしいなという思いがあります。

たとえば、花粉症の原因となるスギぐらいは知っておいてほしいし、福島県が代表的な産地だったシイタケ栽培用のほだ木に使うコナラも、福島大学の食農学類を出た人間として少なくとも知っておいてほしい。

でも、農業生産に関係ないところで、少しずつ自然の楽しさを経験していければいいなと思っています。チョウが飛んでいるのを見つけたら捕まえてみようとか、野生の生物がいっぱいいますので触れてみようとか、そういう自然環境に接することを農場実習とあわ



シイタケのほだ木栽培

せて、もっともつとできればいいなと思いますね。

生源寺　ちよつとだけ補足しておきますと、「大学の農学部は農場を設置しなければならない」というルールになっているんです。その農場は、ふつうは塀で囲まれて、外から自由に入る事ができない形になっている。しかし幸か不幸か、福島大学の食農学類は、そういう意味での農場は確保できていないんです。

近隣の農家の何人かの方からまとまった水田を20年契約で借りることができたんです。農地法に基づいた貸借で、それを農場にしているんです。

しかも、キャンパスから歩いていける距離のところにあります。これは、先ほど深山先生がおっしゃった近隣の農家との交流の観点でいうと、結果的には非常によかったと思います。

田植えのときには、学長も参加して、マスコミなんかもけっこう来てくれる。そんななかで近隣の農家の方が「あんなやり方じゃだめだ」というようなことを含めて、アドバイスをくれることもあります。

そういう意味では、福島大学の農場は通常の農学系学部の農場とはちよつと違う。当初は残念ながら用意できなかったという感覚でいたんですけれども、いまとなつては、これはこれでいいところがありますね。

ほかに樹園地、畑も別途借りております。また、農場実習には食品科学の先生方も参加されています。多くの先生が農場基礎実習に関係していると思いますが、熊谷先生、食品科学の関係はどうでしょうか。

熊谷　導入としての簡単な食品の成分分析、衛生的な菌の分析をやっています。学生全員



を半分に分けても50人強になりますので、全員が入れ
る実験室を確保すること自体が非常に難しい。学生に
は不利益にならないように、やれる範囲で、まず分析
の体験をするところから始めているのはいいところか
なと思います。

簡単な例でいうと、手洗い後の手についている微生
物の数をはかれるキットが売っているのですが、それを
使って、「黄色ブドウ球菌がいるね」とか、「大腸菌群
がいるね」「一般生菌がいるね」とかを行っています。
1年目は、そういった食品の衛生的な分析の最初の一
歩からやっている感じですね。

生源寺 そのほか、農場基礎実習について何かござ
いますか。

深山 生源寺先生がおっしゃったように、農場とか
畑が大学の周りにある立地条件がすごくよかった。

福島大学が借りた農場は、周辺に多くの農家さんが
おられ、農家の人が畑の様子をよく見てくださってい
て、私たちが作業をしていると声をかけてくださる。
「この土地はこうして管理するといんだよ」と教



実習農場の水田 実習農場は農家の協力を得て借り受けている。この水田は農場実習で学生たちが植えた稲がまもなく収穫期を迎えるころ。穂の実り方が学生のグループごとに少し異なっており、それが生きた教材になる（2022年8月撮影）。

えてくれるんですね。それが結果的にはすごくよかったなと思っています。

ほかの大学では農学部といえども、周辺の都市化がどんどん進んでいて、農地を維持する、とくに水田を維持するのはなかなか難しくなってきたています。農業高校でさえそうなのだと聞いていますので、福島大学は農場実習をするロケーションにすごく恵まれていると思います。

藤野 できれば、それにプラスアルファして、農家さんの話を聞くだけの時間や、農機具も何も持たずに集落を歩いてまわって、集落を知る時間もあるといいですね。

と言うのも、このあたりは奥州街道が通っていましたので、歴史的に見ると、軽く見積もっても1000年以上の地域性がある場所なんです。実際に大学のなかに街道が走っています。それだけでもおもしろいうえに、たぶん農家さんも十何代と続いている方がいっぱいいらっしゃるんじゃないかと思っています。そういう方たちの話を聞ける機会はなかなかないと思うんです。

ご近所さんも「いや、うちはしよせん、まだ200年ぐらいですから」とか言われるけど、村の暮らしとか、お祭りとか、結ゆいという共同作業制度のこととか、そこで暮らす人たちのことも一緒に知ってほしい。福島大学として、そうしたことをやったらいいのになと思います。

生源寺 農村社会をきちんと理解するということですね。

深山 先ほど話したサークルに所属する学生たちが近所の農家さんとかかなり関係を深めていて、農作業に行かせてもらっているらしいんです。いろいろな農家さんから「うちにも来ているよ」って聞いています。そういう面でも、歩いて行けるところにいっぱい農家がある



のはよかったなと思いますし、さらに藤野先生みたいな視点があると、学習効果も上がると、お話を聞いて思いました。

農学実践型教育① 伊達市

生源寺 それでは、食農学類の特色あるカリキュラムの二つ目ということで、「農学実践型教育」についてもお話を伺えればと思います。

現在、県内の7つの市町村をフィールドにして、2年生の後半から3年生の終わりまで、合わせて1年半、何度も通って現場の課題を掘り起こして、それに対する解決策やアイデアを練ってもらおうというカリキュラムです。

これは専門コースに分かれた段階でスタートすることとも関係するのですが、たとえば猪苗代町のフィールドについても、あるいは伊達市についても、食農学類にある4つの専門コースの学生の混成部隊となっています。同様に、教員も基本的には専門コースの混成部隊です。

それぞれの地域の特徴や課題に向き合うことが非常に大事です。現在の7つのフィールドのうち、伊達市と猪苗代町のお話を伺います。というのは、伊達は藤野先生が、猪苗代は熊谷先生が主任を務めておられるからです。

伊達については、私自身、実習の報告会のときに藤野先生の指導されている学生から養蚕と生糸の歴史のお話を伺いました。現在の問題もさることな



福島県中通りの北部にあり、県庁所在地の福島市の東隣りにある。面積265km²、人口約5万6千人。



がら、歴史や伝統の問題についてもう一度考え直すという姿勢が印象的でした。この点も含めて、伊達での取り組みについて、特徴的なことをお話しいただければと思います。

藤野 実践型教育のそもそもの立てつけという点で言うと、フィールドとなっている市町村のなかで課題を見つけていきましょう、それを解決していきましょうということです。

伊達市は非常に農作物が多品種にわたっているんです。

たとえば桃もすごいんですけども、キュウリもすごいし、あんぼ柿もすごい。あんぼ柿



あんぼ柿 大正時代に伊達市梁川町で開発された。干しただけの干し柿とは違い、渋柿を硫黄で燻蒸し乾燥させてつくる。そのため、あんぼ柿は、少し生っぽい感触で柔らかいのが特徴となっている。また、カリウムやビタミンなどの栄養素を豊富に含んでいて栄養価も高い。



伊達市 東に霊山、西には吾妻連峰、北側は宮城県境の山々が広がる福島盆地のなかにあり、市内には阿武隈川が流れる。江戸時代以降は養蚕の街として発展し、現在は名産のあんぼ柿や全国有数の収穫量を誇るモモ、イチゴの産地として有名。



霊山 伊達市の観光地として人気の奇岩がそびえる岩山。古くから修験の霊場として知られている。現在は、山中にハイキングコースが整備されており、紅葉の時期には多くの人で賑わう。

は伊達の梁川地区^{つんがわ}で独自開発されたおいしい干し柿なんです。さらにイチゴは福島県内でナンバー1なんです。1軒の農家が多品目を生産する、農業地帯として珍しい特徴を持っているんですね。

それで伊達市ではなぜ、いろんな作物がつけられているのかを探ってみようということの一つのテーマにいたんですね。

学生と話をして、課題を探る前にまずは伊達市の特徴を調べましょうという話になり、いろいろな農家さんにヒアリングをしました。

ある農家さんはイチゴのハウス（温室）栽培していました。その農家さんはハウスの中の温度とか二酸化炭素の濃度とか、気象データを記録していて、「データがあるんだけど、これを何とか、もっと有効に使えないか」と、ほんとうに漠然とした相談をされたんです。

そもそも農家さんが何でそんなデータを取られているかと言うと、イチゴのようにハウスで育てる作物は、二酸化炭素がハウス内に多くあると光合成が促進されてよく生長します。ボイラーで灯油を燃やすだけで二酸化炭素の濃度を上げられます。二酸化炭素濃度を一定に保つためにセンサーで自動的に燃焼されるので、いろいろな計測が行われています。

そこで、このデータを分析するチームを立ち上げました。データを分析することはプロである研究者から見たら普通のことなのですが、預かったデータはエクセルで開けないくらいのデータ量なので、それを扱うだけでも学生は大変です。自分たちで仮説をつくり、こういう条件だと生長がよいのではないかなどと考えて、がんばってやっています。当然、味も重要なので、味についての検査などを、地域の何十軒もの農家さんにご協力いただいてやって

農業・農村に関するデータ

【都道府県別の農業産出額】

(単位：億円)

	農業産出額	1 位部門		2 位部門		3 位部門		順位
北海道	12667	畜産	7337	野菜	2145	米	1198	1 (1)
青森県	3262	果実	906	畜産	883	野菜	821	7 (7)
岩手県	2741	畜産	1628	米	566	野菜	292	10 (10)
宮城県	1902	米	795	畜産	724	野菜	275	17 (18)
秋田県	1898	米	1078	畜産	365	野菜	301	18 (19)
山形県	2508	米	837	果実	729	野菜	465	13 (11)
福島県	2116	米	762	野菜	480	畜産	434	15 (15)
茨城県	4417	野菜	1645	畜産	1270	米	756	3 (3)
栃木県	2875	畜産	1225	野菜	756	米	662	9 (9)
群馬県	2463	畜産	1079	野菜	1004	米	152	14 (14)
埼玉県	1678	野菜	831	米	327	畜産	245	20 (20)
千葉県	3858	野菜	1383	畜産	1194	米	641	4 (4)
東京都	229	野菜	129	果実	32	花き	32	47 (47)
神奈川県	659	野菜	345	畜産	147	果実	64	37 (38)
新潟県	2526	米	1503	畜産	485	野菜	321	12 (13)
富山県	629	米	434	畜産	78	野菜	54	39 (39)
石川県	535	米	281	野菜	101	畜産	88	43 (43)
福井県	451	米	284	野菜	80	畜産	44	44 (44)
山梨県	974	果実	650	野菜	117	畜産	78	32 (34)
長野県	2697	果実	894	野菜	891	米	413	11 (12)
岐阜県	1093	畜産	411	野菜	339	米	206	30 (31)
静岡県	1887	野菜	582	畜産	451	果実	254	19 (17)
愛知県	2893	野菜	1011	畜産	831	花き	497	8 (8)

令和4年版『食料・農業・農村白書』をもとに作成。

資料：農林水産省「生産農業所得統計」

注：1) 令和2(2020)年の数値。()内は、令和元(2019)年の順位

2) 農業産出額には、自都道府県で生産され農業へ再投入した中間生産物(種子、子豚等)は含まない。

3) 順位付けは、原数値(100万円単位)により判定した。

【都道府県別の農業産出額（続き）】

（単位：億円）

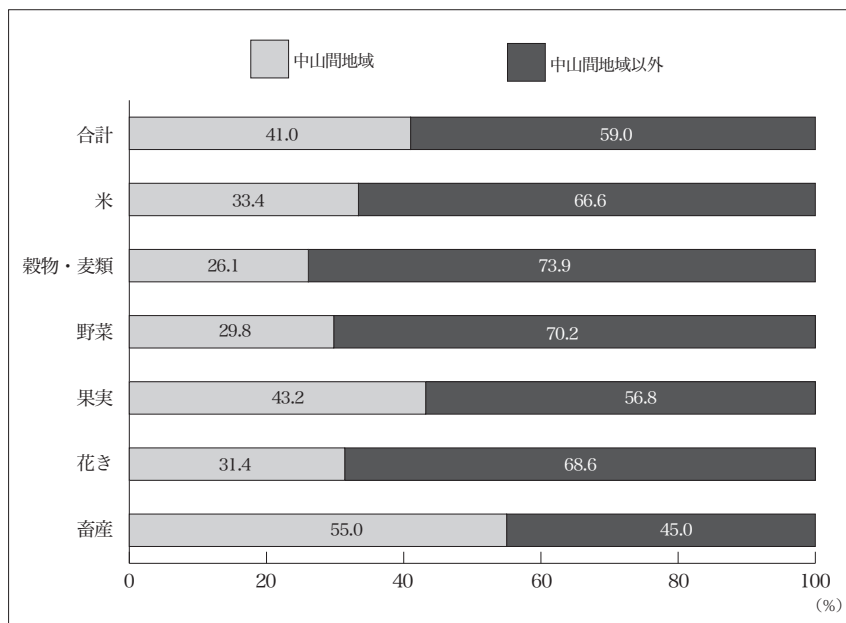
	農業産出額	1 位部門		2 位部門		3 位部門		順位
三重県	1043	畜産	419	米	270	野菜	145	31 (30)
滋賀県	619	米	353	畜産	106	野菜	105	41 (40)
京都府	642	野菜	250	米	171	畜産	125	38 (37)
大阪府	311	野菜	141	米	65	果実	65	46 (46)
兵庫県	1478	畜産	592	米	420	野菜	349	22 (22)
奈良県	395	野菜	113	米	95	果実	75	45 (45)
和歌山県	1104	果実	759	野菜	141	米	78	29 (29)
鳥取県	764	畜産	290	野菜	214	米	150	36 (36)
島根県	620	畜産	253	米	189	野菜	101	40 (42)
岡山県	1414	畜産	585	米	284	果実	264	23 (23)
広島県	1190	畜産	487	野菜	247	米	236	27 (26)
山口県	589	畜産	182	野菜	160	米	145	42 (41)
徳島県	955	野菜	352	畜産	255	米	123	33 (33)
香川県	808	畜産	320	野菜	242	米	121	35 (35)
愛媛県	1226	果実	532	畜産	258	野菜	197	24 (24)
高知県	1113	野菜	711	米	114	果実	111	28 (28)
福岡県	1977	野菜	707	畜産	383	米	344	16 (16)
佐賀県	1219	野菜	343	畜産	342	米	227	25 (27)
長崎県	1491	畜産	532	野菜	471	果実	140	21 (21)
熊本県	3407	野菜	1221	畜産	1192	米	361	5 (6)
大分県	1208	畜産	430	野菜	351	米	187	26 (25)
宮崎県	3348	畜産	2157	野菜	681	米	173	6 (5)
鹿児島県	4772	畜産	3120	野菜	562	いも類	305	2 (2)
沖縄県	910	畜産	397	工芸農 作物	225	野菜	127	34 (32)

農業・農村に関するデータ

	全国	中山間地域	割合
人口（万人）	12709	1420	11.2%
農業経営体数	1076	453	42.1%
農地面積（ha）	4372	1617	37.0%
農業産出額（億円）	89370	36647	41.0%
総土地面積（千 ha）	37286	24118	64.7%

中山間地域の主要指標 中山間地域は、人口では全国の約 1 割、農業経営体数、農地面積、農業産出額では約 4 割、国土面積でも 6 割以上を占めるなど、食料生産を担うとともに、豊かな自然や景観の形成・保全といった多面的な機能の発揮の面で重要な役割を担っている。

（令和 4 年版『食料・農業・農村白書』をもとに作成）



農業産出額に占める中山間地域の割合 農業産出額に占める中山間地域の割合を品目別に見ると、令和 2（2020）年は米や穀物・麦類の割合が 3 割程度の方、果実では 4 割以上、畜産では 5 割以上を占め全品目の平均値である約 4 割より高くなっている。これは果樹や畜産は地形上の制約が比較的小さいためと考えられる。（令和 4 年版『食料・農業・農村白書』をもとに作成）

います。

藤野 もう一つのチームは、歴史の調査をしています。

伊達は、もともとは養蚕ようさんが盛んで、明治時代には世界で一番の蚕種さんしゆ（蚕の卵）の産地だったと言われています。それがいまは多品種の農作物を扱っている産地になり、福島県内でも相当の地位を占めています。

じゃあ、この町にいったい何があつたんだということで、養蚕について詳しく調べていったんですね。どこで養蚕をやっていたのかとか、ほんとうに一番だったのか、明治時代の統計データを打ち込みながら歴史の地道な調査をやっています。

いまに至るまでいったい何があつたのか。過去の努力がわかれば、たぶん、未来に何をしなければいけないかということも見えてくると思うんです。当然、いまの伊達の農業が未来永劫続くわけではない。私たちが見ているいまの伊達は、変化の一点ですので、その変化の流れを見なければ、未来の農業の形が見えるだろうと思うんです。結果が出るのはちよつと先になるので大変なんですけど……、というのが伊達の養蚕の話です。

もう一つ、学生や農家さんから出てきたのが、ツイッターなどのSNSの利用方法について教えてほしいということです。やっぱり、SNSの活用は時代を表しているかなと思います。

プロの世界では、SNSをあたりまえにマーケティングツールとして活用していて、どういうお客さんに何をアピールしたらいいのかもわかりますし、「誰が」や「年齢」「どこからアクセスしてきたか」といった情報も裏側でわかるようになっていきます。もちろん、すべて

伊達市の養蚕の歴史

伊達地方の養蚕業は、奈良・平安時代に始まり、当時生産された「信夫文字摺絹」は都でも評判を呼んだと伝わっています。

時代を経て、貨幣・商品経済が発達した江戸時代には幕府や各藩による養蚕業や織物業が奨励されたこともあり、蚕種（蚕の卵）の品種改良や飼育方法などの研究、蚕種・養蚕・製糸の分業化が進み、安永年間（1772～1780）には、特に幕府から「蚕種本場」の称号が独占して与えられました。

また、絹製品が主要な輸出品であった明治・大正時代にかけては、養蚕業・製糸業は日本の近代化を進める基幹産業の位置を占めており、伊達地方における養蚕業は先進地として全国をリードするとともに、地域経済の発展、文化の振興にも大きな影響を及ぼしました。（伊達市 HP「伊達地方の養蚕関連用具」より一部抜粋）

日本一となった伊達市の養蚕

江戸時代の半ばころ、阿武隈川沿いの伏黒・梁川・粟野・伊達崎・保原・中瀬などの村々は蚕種（蚕蛾の卵）の生産で繁盛していました。安永2年（1773）には、冥加永（当時の税金）240両を納める代わりに川筋のこれら40村が幕府から「蚕種本場」の称号を独占して与えられ、伊達地方の蚕種製造業は、名実ともに日本一と認められました。（伊達市 HP「伊達地方の養蚕関連用具」より）

美濃や近江、やがて奥州からも「登せ糸」として京都へ多くの糸が運ばれるようになったのです。これら糸の多くは各地で行なわれる定期市で取引されました。伊達郡で開かれた諏訪市・天王市・掛田市は生糸に特化した市で、中でも天王市は全国の糸価の相場が決まるとまで言われました。（伊達市 HP「伊達地方の養蚕業」より）



祭りにあわせて開かれた「天王市」という生糸市のような市。市は京都などから商人が買いつけに訪れ、賑わった。



生糸市で買いつけた糸は、江戸や京都へ運ばれていった。

ではないですが。

たとえば、学生がやっている日常の写真と、農家さんが地道に農作業をやっている2つの写真を投稿したとして、それを見て「いいね！」を押す人に違いがあるのかなどもわかりません。そうした情報を見ていくと、農作物をアピールする際に、もつと若い人たちにウケるにはこうしたほうがいいんじゃないかといった、SNSの発信方法の教科書的なものをつくれるんじゃないかなと思っています。

こうしたアプローチをするのは、食農学類の4つのコースでできるようなことは実践型教育でなくていいんじゃないのかなと思ったんですね。せつかく4つのコースの学生が混成チームとなってやるんだから、専門コースではできないことを勉強したほうがいいと思うんです。こうした方法が正解というわけではないんですが、違うものの見方を学生にしてみらっているかなと思います。

生源寺 数百年の歴史の話とSNSの最先端の話のミックスですね。

藤野 ちゃんと言っておかないといけないのが、ただ歴史を知りたいだけではなくて、最終的には現代において利益へ還元したいわけです。伊達市は伊達政宗、伊達一族の出身地です。それを題材としたアニメが市の公式PRビデオになっています。たとえばそれをもつと生かすにはどうするかなど、いろいろ考えています。

生源寺 それでは、猪苗代のテーマなり特徴、あるいは学生のようなすを、熊谷先生、紹介してもらえますか。

熊谷 私が担当する猪苗代町は、農業と観光の町で、食品工業などが弱いんです。さらに猪苗代湖の水を汚染してはいけないということもあるので、なかなか化学工業の発展が難しい地域なんですね。そうした猪苗代では、学生にテーマを自由に考えさせるとというのがポイントになっています。

進めかたをざっくりと申し上げますと、4つか5つのグループに分けて、グループディスカッションをさせて、その内容をプレゼン資料にして、テーマ案として町の人たちに聞いてもらう。その後、町の人たちとディスカッションを行って、その案がいか悪いか、需要があるのか、マーケットで言うニーズになるかをもらんでもらう。それを福島大学に持ち帰って、さらにグループで練っていくという手順になります。

去年の1期生の例で言いますと、テーマが4つできました。

いくつか紹介しますと、福島のジビエは放射性物質の問題で食べられないけれども、食べられるようになったとき、ジビエの需要性がどれくらいあるかを調べたりとか、たとえば居住人口を増やすのはなかなか難しいけど、マルシェを開いて交流人口を増やしていくとか。

あとは「いなわしろ天の香^{てんのかおり}」という猪苗代産のソバの品種を有名にしたいということ、いわゆる麺としての蕎麦ではなくて、ほかの活用をしたいという



猪苗代町 福島県の会津地方にあり、北に磐梯山、南に猪苗代湖がある。面積395km²、人口約1万3千人。

グループがいて、それが最終的にはフランス料理のガレットになりました。蕎麦粉の活用としてうまくいきまして、猪苗代ビール館の人が気に入ってくれまして、限定的ながら施設での販売ができました。

次もマーケットの話になるんですけども、学生が企画をたててプレゼンすることはできるけど、作った物を実際に売ることとはなかなかできないので、7割、8割の状態でもいいから、まず企画と試作品をそろえてプレゼンでアピールしようという感じでやっていますね。もし気に入ってもらえたら、そこから先は販売する町の人たちが自分たちで調達して進めていくと思いますので。

このような形で販売者などの意見を聞いて企画を練っていくと、学生の成長が見えますね。現場力が身につけていくと言ったらいかな。そういうことが学生から感じられました。

2期生では、農作物にどういうブランド名をつければいいとか、猪苗代の野菜をどうアピールすればいいかみたいな、農作物のブランディングをしていますね。

それに猪苗代町は磐梯高原のおかげかわからないけど、もちのいい花が多いんです。そういう花があるのに、まだまだアピールが足りない。だから、どうにかアピールできる場をつくりたいというテーマもあります。

もう一つ、非常においしい磐梯トマトのハネ品とか、B・C級品を活用して、磐梯トマトカレーを作ったりもしました。前期の終わりにカレーを作って町の人に試食してもらった。そういうアピールをして、後期も町の人たちとやりとりして、何とか気に入ってもらって物を作っていく。やっぱり物が出来るとうれしじゃないですか。あたりまえなんですけど、





猪苗代湖 会津若松市・郡山市・猪苗代町にまたがり、日本で4番目の広さを持つ湖。夏は湖水浴を楽しむ人たちが賑わう。



磐梯山 福島県を代表する山の一つで、標高 1816m の活火山。福島県の猪苗代町、磐梯町、北塩原村にまたがり、山の周囲には温泉地も多い。

野口英世記念館 現在の千円札の肖像画になっている野口英世（1876～1923）の生涯と業績を紹介する施設。写真は、野口英世が16歳まで過ごした生家。場所も形も当時のまま保存されている。





ガレットを企画した学生たち 猪苗代地ビール館で『まるごと猪苗代ガレット』として期間限定販売をした。写真は、福島テレビの番組がガレットを紹介したときのようす。



猪苗代町のブランド蕎麦粉「いなわしろ天の香」を使ってつくられたガレット

自分が考えたものが成し遂げられるとうれしい。そういう部分を教員がプッシュして、町との接点をもっと増やしていくというのがいいのかなと思います。

そうすると、さっきの就職活動におけるガクチカの話じゃないですけども、学生のエンリシートに「ガレットができたことを書けばいいじゃない」とか、自分が成し遂げたことをガクチカに書けるようになる。町も学生や観光客が来てウインになるし、学生も実践的な体験ができてウインになる。そんなのができているかなという気がします。

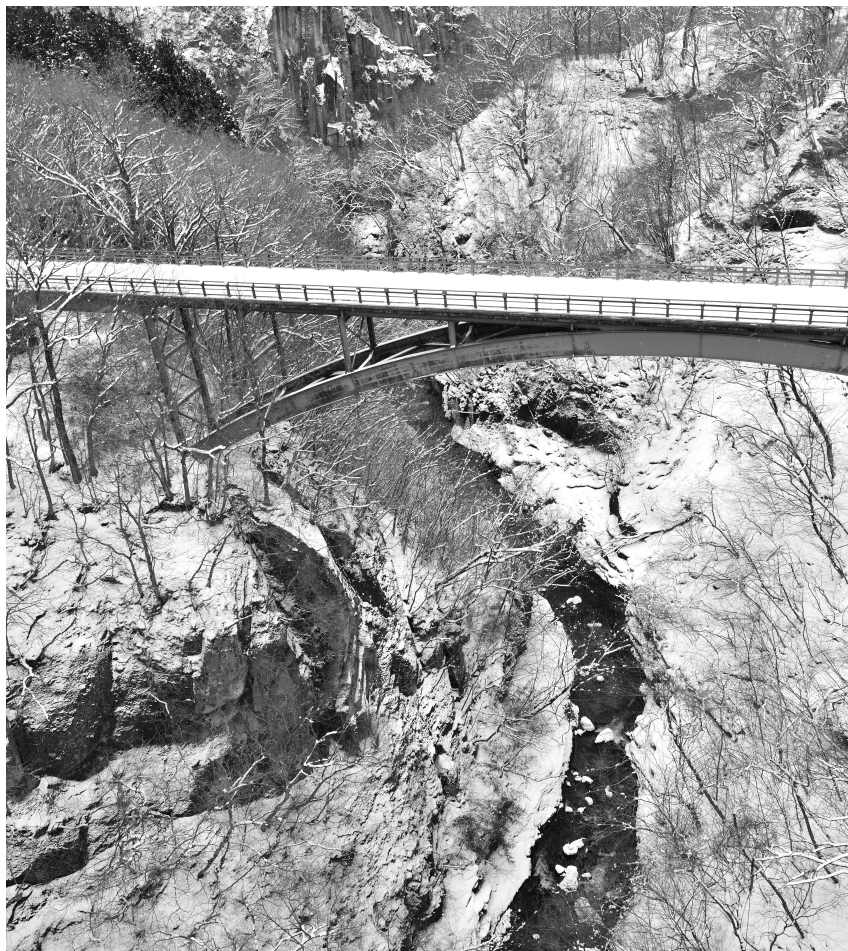
農学実践型教育③ 西郷村

生源寺 深山先生は西郷村を担当され、はじめてでいろいろ苦労されたのではと思いますけれども、そのへんを含めて、一言お願いします。

深山 西郷村はもともと高校もなければ大学もなく、大学生が来ることもなかった地域だったんですね。そこで、若い人が来てくれて何かしてくれればというぐらいの温度感だったんです。

私が最初に西郷村へ行った時、村の農業を活性化させるために、村が若手専業農家の人たちに声をかけて集まりをつくって定期的に勉強会をしていたんです。そして、ちょうど新しい直売場を村がつくるということを検討していたところで。その勉強会に行かせてもらって話をさせてもらったら、一緒にできないかということになったんです。ただ、集まりの時にあまり意見を言ってくれないんですね。それでも、次の日に個別に農家さんを訪ねて行くと、





雪割橋 西郷村は、阿武隈川の上流に位置する。写真は雪割渓谷にかかる橋。



西郷村 福島県の南部に位置し、東北新幹線の新白河駅があり、首都圏への新幹線通勤の利用者もある。また白河市に隣接しており、村の人口は増え続けている。面積 192km²、人口約 2 万 1 千人。

みなさん自分の意見をちゃんともって話してください。逆に、訪ねて行かないとなかなか意見が出ないので、そうして足を運んで話をしていんです。

でも、学生を連れて行くようになったら、みなさんの態度が全然違いました。農家さんたちはすごいウェルカムムードになって。若い人が来てくれたことを非常に喜ばれて、いろいろなディスカッションをしてくれたんですね。私が最初に行って話をしていたときにはオープンに話してくれなかったんですが、結果的にはほんとうによかったなと思っています。私もとても勉強になりました。

いまは学生たちが西郷村の農家から課題を見つけて、解決に取り組んでいます。

たとえば、農家の売上げが下がる時期に何かできないかとか、お盆やお彼岸の需要に間に合わなかったお花の何か新しい活用はないかとか。私も知らなかったんですが、いま若い人にドライフラワーが大人気らしいんです。「ドライフラワーにできないな花束にすればいいんじゃない」という学生のアイデアを実際にやったらすごくウケて、そんなことをやっていきます。



西郷村の花でドライフラワーの花束をつくる学生たち 西郷村にある「まるごと西郷館」という農産物直売所で1500円以上の買い物をした客にプレゼントした。

私は見ているだけで、学生が農家や役場の方々と話をして、アイデアを具現化する。それで学生も達成感を得ていますし、農家の方も新たな取り組みにとっても喜んでいらつしやるので、よかったですね。

生源寺 農学実践型教育では、学生が刺激を受けて、それが将来の進路、あるいは卒論のテーマに影響することは当然あるでしょうね。そのものずばりということはないにしても、どうでしょうかね。

深山 そうですね。農家との話し合いなどを経験したことで、「農業改良普及員になりたいと思った」と言っている学生が何人もいますし、刺激は受けているんじゃないかと思えますね。

藤野 農学実践型教育というくくりで言うと、1年半かけて行う7市町村にプラスして、金山町と南会津町二つもありますね。

生源寺 集中型の二つですね。私も南会津町に行きましたけれども、非常に印象的だったですね。伝統的な発酵食品を使つて、いまの高校生の若者が作り出したレシピが非常におもしろかったですね。伝統食品を使いながら、全部カタカナが入っている食品になっているんですね（笑）。伝統食品が若者とクロ



南会津町にある前沢曲家集落 曲家は、母屋と馬屋がL字形に一体となった家屋で、人と馬が一緒に暮らした。前沢集落の民家は、明治時代に建てられ、統一的な景観を保っていることから、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

スした場合に何ができるかということ物語っているような、そんな印象を受けたことがあります。

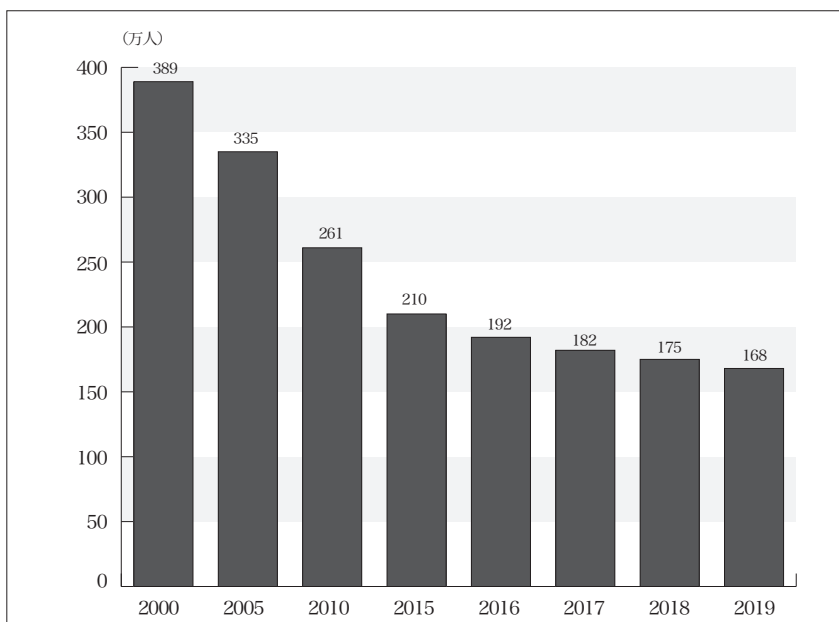
学びからコミュニティへ

生源寺　すでにいろいろと触れられたと思うんですが、食農学類と地域社会のつながりということでしょうかお話をしていただけだと思います。地域社会とのつながりについては、研究に対してのニーズもかなりあるでしょうが、逆に成果を還元するという課題も4年目に入ってそろそろ浮上し始めているかなと思います。逆でしょうか。漠然とした聞き方かもしれませんが、深山先生はいろいろな地域から招かれて、蔬菜・花きについてのアドバイスをされていると思います。

深山　ある地域というか福島県全体について考えると、福島県はものすごく広くて、農業の形態や状況も地域によってかなり違いますので、それぞれの地域で対応課題も変わってくると思うんです。全国どこでも抱える課題かとは思いますが、まずこれからの担い手をどうするのかでしょうか。就農者の高齢化が進み、今後の担い手がいらないという状況で何をしたらいいのか。私を感じているのは、技術面からできる部分のほかに、コミュニティをまずつくらなさいいけないんじゃないかという面があります。今後はコミュニティという社会科学の面も含めたうえで、自然科学としての技術を確立していく。その両方を一緒に進めていくのが必要だということです。



農業・農村に関するデータ



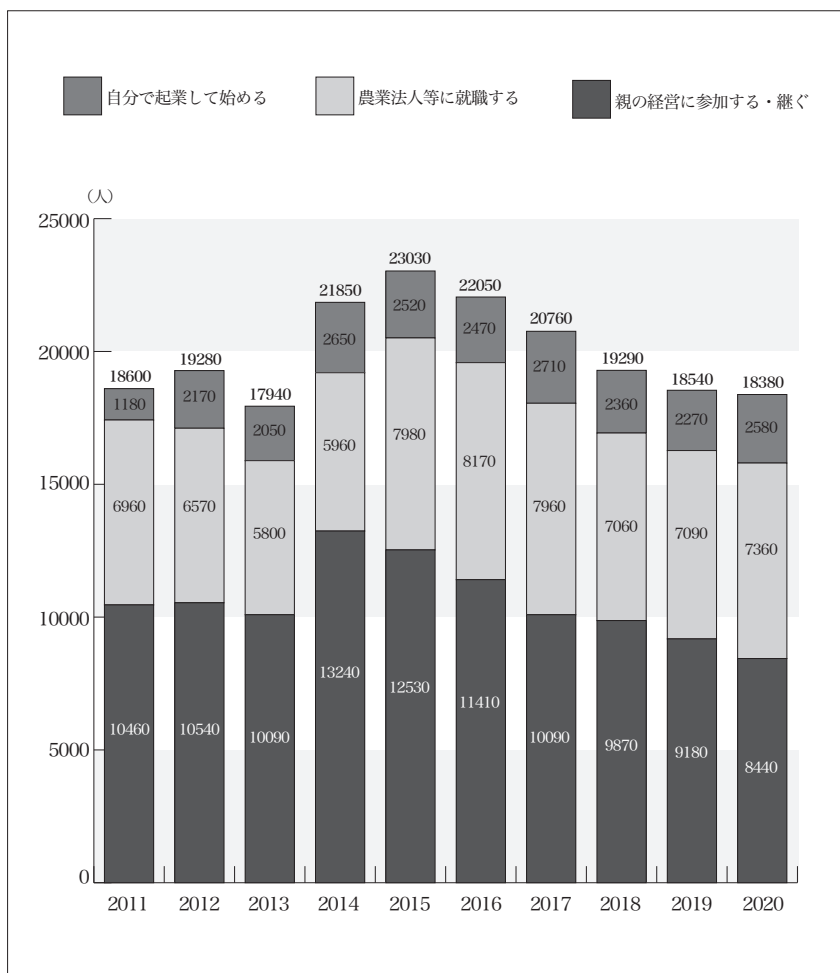
農業就業人口の推移 日本の農業就業人口は、2010年の約261万人から2019年の約168万人へと、9年で約93万人減少し、農業の担い手が不足している。

(農林水産省「農業センサス」「農業構造動態調査」をもとに作成)

	2010年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
農業就業人口 (万人)	260.6	209.9	192.2	181.6	175.3	168.1
うち65歳以上 (万人)	160.5	133.1	125.4	120.7	120.0	118.0
65歳以上の割合	61.6%	63.5%	65.2%	66.5%	68.5%	70.2%
平均年齢	66.1歳	67.0歳	66.8歳	66.6歳	66.6歳	66.8歳

農業就業者の高齢化 農業就業人口のうち65歳以上の高齢者が占める割合は、2010年61.6%から2019年70.2%へと増加しており、全国的に高齢化が進んでいることがわかる。

(農林水産省「農業労働力に関する統計 農業就業人口及び基幹的農業従事者数」をもとに作成)



49歳以下の新規就農者数の推移 直近10年は40代以下の新規就農者が2万人前後で推移しており、とくに、「農業法人に就職する」「起業する」の割合が増えている。

(農林水産省『新・農業人ハンドブック2022』をもとに作成)

たとえば、私は福島県東部にあたる浜通りの営農再開ビジョンに携わらせてもらったんですが、浜通りはほんとうに担い手がいらないんです。けれども、農地は非常に整備されつつあります。その農地を使って営農を再開し、担い手が極端にいないなかで、収益を得られる農業をどうやってやるようにしていくのか。技術ということもあるんですけど、地域社会をどうやってつくっていくのかというのもある。それを研究成果として出していくのは、いろいろなことが必要だなと感じますね。

生源寺 熊谷先生は前任地では食品産業の亀田製菓で働いておられて、ご出身は新潟大学ということですけども、新潟大学と亀田製菓のつながりも少し念頭におきながら、福島県での食品産業と食農学類との研究上の交流というか連携というか、そのあたりはどのようにお考えですか。

熊谷 新潟県は米菓だったり、パックご飯だったり、餅、かまぼことか、わりと食品産業が多いですね。

一方、福島県は、食品産業はあるんですけども、そんなに大きい会社がないんですね。売上高が500億円から1000億円強の会社は少ないかと思っています。そういう意味で、今後の期待もあるんですけど、まずは食農学類ができたことで、卒業生が地元の会社に勤めて食品工業に貢献できるのはいいことだと思います。

そして、大学から何ができるかという話になってくると思うんですけども、福島のいままである文化・産業を育成するのに加えて、今までになかったイノベーションなところが必要になってくるのかなと思っています。イノベーションものをいまのご時世にすぐに出



していくのはすごい難しいので、まずはいまある産業をどう大きくしていけばいいのかというところが中心になるかと思っています。

私のことを話しますと、福島大学に着任して4年になりますが、福島県の企業さんと学術指導なり共同研究契約なりを結ぼうとしていまして、なるべく地元の企業さんとの関わりを深めています。いままで経験してきた食品加工の分野で、技術だけではなくて、監査とか、HACCPなどの衛生管理も含めて貢献できればいいかなと思っています。

福島県には企業の大小はあるけれども、お酒も含めて発酵食品が多い地域だと思います。私はこれまで植物由来の乳酸菌を研究してきましたし、私の同僚には、お酒の先生もいますし、しょうゆの乳酸菌を研究されている先生もいます。

そういう先生たちと、お酒も含めて、何とか食品産業との関わりが持てるようになればいいんじゃないかなと思っています。

生源寺 テーマを広げ過ぎてしまうといけないので言及しませんが、昨年の4月に、福島大学は発酵醸造研究所を設置しています。食農学類の附属施設としてですね。すでに若手、あるいはベテランの教員が7人着任しています。食農学類の教員は全員が発酵醸造研究所を兼務することになっています。発酵醸造という部分と、その川上、川下の両面をカバーする研究も進めているということです。熊谷先生のお話のなかには、そのことも少し含まれているかと思います。

藤野先生は、専門から言いますと、コミュニティや農村社会という面を含めて、地域社会への貢献ということではいかがでしょうか。

「HACCP（ハサップ）」

原料の入荷から製造、製品の出荷までのすべての工程で、食中毒や異物混入などの危害要因を科学的根拠に基づき管理する方法、



藤野先生は県の森林審議会の会長もされていて、地域社会との関わりがあるかと思いますが、そのあたりについてもいかがでしょうか。

藤野 私自身は研究面で県内の企業などと一緒にというのはほぼないんですけれども、私のいる生産環境学コースで言うと、望月翔太先生が野生鳥獣の専門家なので、いろいろなところからひっきりなしに呼ばれています。望月先生は県内すべての市町村を回ったらしいです。福島県は市町村の数がとても多いんですけれども。

生源寺 福島県には59の市町村がありますね。

藤野 はい。そのすべてを回ったとおっしゃっていました。それも一度行つて終わりではなくて、現地指導もあれば、継続的に調査を行うこともあるので、おそらく今後もまだまだニーズが非常に多いのかなと思います。

私のことと言いますと、県の森林審議会のほかに、「林業アカデミーふくしま」の運営会議の副座長や国見町森林委員会の会長をしています。私の場合の地域社会の貢献と言うと、こうした感じで委員とか、アドバイザーの仕事が増えてきているかなと思います。

これからの農学のあり方

生源寺 最初に申し上げたように、福島大学食農学類は教員の数や学生定員が日本の大学、とくに国立大学のなかで一番小さいグループです。教員数が38人というのは、われわれの小さい頃の小学校のクラスの人数とほぼ同じですよ。そうすると、この子は何をやっている



のかとか、あるいは何が得意であるのかの認識がほぼできるんですね。

われわれはあたりまえのように感じていますけれども、たとえば熊谷先生であれば、元亀田製菓で、こういうことをやっておられた、ということをお互いに全部知っているんですね。したがって、コースを越えて、いろいろな繋がりで研究ができています。これは通常の大きな大学ではあり得ないことじゃないかと思うんですね。みなさんがそれぞれ何をやっているかということについて、あるいは、そもそも全員の名前を知っているということ自体が稀なことだろうと思うんです。そういう意味では、小さいことのメリットもけっこうあるという感じがしています。

もう一つは、これは福島大学の従来からのシステムを踏襲しているところもあるんですけども、一つの専門分野に一人の教員という形です。京都大学も東京大学も、あるいは私の前任地の名古屋大学もそうなんですけれども、学科のなかに研究室、いわゆる講座があつて、教授・准教授がいて、助教・ポスドクがいるという形の組織で仕事をされているわけですね。それはそれでいいところはあるのかもしれませんが、福島大学の場合には、それぞれが独立して個別的、自律的に仕事をされている形があるわけです。それぞれがある意味では自由度の高い働きかたをしている。ただ、エフォートもかなり求められているので大変だということもありますけれども、いまのシステムそのものに、なかなかいい面があると私自身は受けとめております。たまたまそうなったという経緯もあるかもしれませんが、最初の教員をフェアに選考したこともあつて、うまく動いているのかなと思います。

多少手前みその話をいたしましたけれども、今後の課題という観点から、それぞれの思



いなりをお話しただけだと思います。私の個人的な経験で言いますと、来春までに福島で6年過ごすわけです。この6年間は、農学のあり方、とくに教育に関してのあり方について真面目に考えた6年間だったなと思います。

どういうことかと申しますと、前任地の名古屋大学、その前の東京大学では、学部長をやったり、学会の会長をやったりしたんですけれども、農学そのもののあり方について真面目に考えた経験は、正直なかったんですね。

藤野 仮にも国の審議会のトップをされた方ですけど（笑）。

生源寺 そういう立場にあった人間でありながら、真面目に農学のあり方を考えたのは、この6年間で初めてだったという感じがしています。その意味で非常に意義深い、価値のある6年になるだろうと個人的には思っております。

ただ、課題もあると思います。食農学類のここを少し考え直さなければいけないとか、ここはもっと強くしろとか、これはいらぬとか……。とくに若手の先生方の意見も聞きながら、今後の研究や教育を伸ばしていく必要はあるかなと思っています。

藤野 私から良いですか。最初におっしゃられた流通の流れの話を言うと、ほんとうの一番の川下側は、スーパーだったり小売店だったりする。そうしたところは、まだまだ弱い部分かなと思うんですね。どれだけ食品開発をしたとしても、ちゃんとしたツールを使って、最終的なマーケティングの部分を教えられる先生が、もっと増えてほしいというのが一つあります。

同時に、そのまったく逆になるんですけれども、生源寺先生は農学のあり方とおっしゃっ



たんですが、そのような哲学を全教員が考えるべきではないかと思ひます。

それと、SDGsとか、いろいろ言われますが、本来は農学が一番それに貢献する産業のはずなのに、福島大学に限らず、自然環境についての関心が薄いのかなと思ひます。じつは農業って、農薬も肥料も垂れ流しているの、一番水質を汚染している産業とも言えるので、そうしたことを意識すると、カリキュラムも、もう少し自然環境とか、SDGsを教えるような科目を増やしようとなると思ひますね。

生源寺 いまの点は、それだけでおそらく1時間、2時間の議論になるかと思ひます。ロシアのウクライナへの侵攻によって食料危機が広がり、レベルががらりと変わる状況になっていることもあります。藤野先生からあつた話は、EUでいうとFarm to Fork Strategy（農場から食卓への戦略）ですよ。それを受けて日本でも「みどりの食料システム戦略」（次ページ図版参照）という形になっています。いろいろ議論はありますが、この際、もう一度農学が存在意義を考え直す、あるいはもう一度再認識することも大事な状況になつてきていると思ひますね。

福島大学食農学類について言うと、地域からの熱い思いでつくり出されたということがありますので、まずは地域貢献があります。けれども、国際的な農学をめぐる状況の変化ということも念頭においておく必要があることは間違ひないと思ひますね。

熊谷先生は、これからの課題ということで、いかがでしょうか。

熊谷 生源寺先生を前に言うこともないんですけれども、地域貢献もわかりますし、学内、もしくは学類内での多様性も必要だろうなと思ひます。あたりまえの話なんですけど、専門



みどりの食料システム戦略の目指す姿

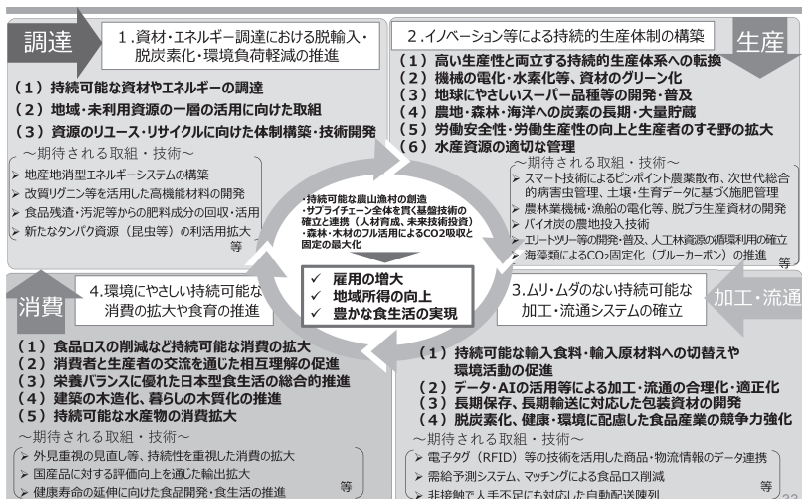
温室効果ガス削減	①農林水産業の CO2 ゼロエミッション化 (2050)
	②農林業機械・漁船の電化・水素化等技術の確立 (2040)
	③化石燃料を使用しない園芸施設への完全移行 (2050)
	④我が国の再エネ導入拡大に歩調を合わせた、農山漁村における再エネの導入 (2050)
環境保全	⑤化学農薬使用量 (リスク換算) の 50% 低減 (2050)
	⑥化学肥料使用量の 30% 低減 (2050)
	⑦耕地面積に占める有機農業の割合を 25% (100 万 ha) に拡大 (2050)
食品産業	⑧事業系食品ロスを 2000 年度比で半減 (2030)
	⑨食品製造業の労働生産性を 2018 年比で 3 割以上向上 (2030)
	⑩飲食料品卸売業の売上高に占める経費の割合を 10% に縮減 (2030)
	⑪食品企業における持続可能性に配慮した輸入原料調達の実現 (2030)
林野	⑫林業用苗木のうちエリートツリー等が占める経費の割合を 3 割 (2030) 9 割以上 (2050) に拡大。 高層木造の技術の確立・木材による炭素貯蔵の最大化 (2040)
水産	⑬漁獲量を 2010 年と同程度 (444 万トン) まで回復 (2030)
	⑭ニホンウナギ、クロマグロ等の養殖において人工種苗比率 100% を実現 (2050) 養魚飼料の全量を配合飼料給餌に転換 (2050)

我が国の食料・農林水産業は、大規模自然災害、地球温暖化、農業者の減少等の生産基盤の脆弱化、地域コミュニティの衰退、生産・消費の変化等の、持続可能性に関する政策課題に直面しています。また、諸外国では SDGs (持続可能な開発目標) や環境を重視する動きが加速しており、あらゆる産業に浸透しつつあることから、我が国の食料・農林水産業においても的確に対応していく必要があります。

これらを踏まえ、農林水産省は令和 3 (2021) 年 5 月に「みどりの食料システム戦略」を策定しました。

(令和 4 年版『食料・農業・農村白書』より)

みどりの食料システム戦略の各分野での具体的な取組



我が国の食料システムは、高品質・高付加価値な農林水産物・商品を消費者に提供している一方で、気候変動への対応や生産基盤の脆弱化等の克服すべき課題に直面しています。世界的にもSDGsが広く浸透し、環境配慮に対する関心が高まってきており、諸外国では環境負荷軽減のための戦略を策定し、国際ルールに反映させようとする動きも出ています。

このような中、将来にわたり食料の安定供給と農林水産業の発展を図るためには、我が国において持続可能な食料システムを構築する必要があります。あわせて、そのシステムをアジアモンスーン地域の持続的な食料システムのモデルとして打ち出し、国際ルールメイキングに参画していくことも必要となっています。

持続可能な食料システムの構築に向け、生産力向上と持続性の両立を実現するには、調達に始まり、生産、加工・流通、消費に至る食料システムを構成する関係者による行動変容と、これに併せ、官民を挙げたイノベーションを強力に推進することが必要です。そのため、みどり戦略では、令和32（2050）年までに目指す姿〈前ページ〉と各分野での具体的な取組を示し、中長期的な観点から、それらの取組を進めていくこととしています。

（令和4年版『食料・農業・農村白書』より）／〈 〉は編集部注

的な研究を得意とする人もいるし、マーケットの出口的な面を得意とする人も必要ですので、やはり多様化は必要かなと思っています。

私自身のことと思うんですが、すべてのことを100%はなかなかできないところがあります。ですから、研究に特化する先生がいたり、教育に特化する先生がいたり、いろいろあっていいのかなというのが一つあります。

また、最先端の研究をする、一方で私の分野で言うところ、食品加工とか商品管理に関わるのととか、そういう方面で地域との共同研究でやることもあります。

たとえば食品加工では、物を作って売るぐらいまでは自分たちで考えるような組織にする。学生の農林サークルだったり、食農Cafeサークルだったり、販売できる仕組みづくりまで考えてもいいのかなという気がします。もちろん、そのための職員とか、人の管理面が必要になるんですけども、そういうこともあっていい。

福島大学に着任する前の話ですが、東京農業大学に食品加工室があると聞いて、そこで働く仲のいい先生に「食品加工室を見せて」と言ったら、「熊谷さんがよく知っている食品会社にあるレベルだから、たぶん見なくてもいいよ」と言われたんです。つまり、大学ではかなり立派なレベルで、作って売ることができるようなんだろうと思います。物づくりまでやるなら、そういう部分も考えていつてもいいのかなという気がします。

藤野 そういったことができる会社を大学につくりますか。

熊谷 それも一つの案としてありますね。

藤野 会社をつくると、すべての企画が「売れるか」の方向に進んでいくかもしれません



けど。

熊谷 そうしたベンチャーが成り立つのかもわかりませんが、おもしろいものを教育的にやっていくのもいいと思います。

生源寺 深山先生は、これからの課題ということで、いかがでしょうか。

深山 地域貢献については、みなさん意識はされていると思うんです。食農学類ができるということで地域の方々から非常に期待をされて、それに応えようとがんばっていますけれども、その期待がすごい大きくて、応えられるのか、若干不安を感じる時もあるんです。できることはやって貢献していきたいと思っておりますが、期待の大きさに果たして応えられるか、いまでも不安を感じています。

もう一つ教育面では、非常に特色のある教育を受けた学生たちが、これから社会に出ていて、ほかの大学の農学部を卒業した学生と比べて、どういう活躍の場面があるのか、卒業後の情報を知りたいなと思います。

福島大学食農学類を卒業したからこそ、こういうことが得意で、こういう場面ですごく力を発揮できるということが、実際の社会のなかではどうなっていくのか。それに私が興味を持っているということもありますし、それを知ったうえで、次の教育の改善なりに繋げていけたらいいなと思いますので、そういう情報も追っかけていきたいとは思っております。

生源寺 この大学のどんな学部も、だいたい同窓会は結成される場合が多いんですけれども、それがどれほど機能しているかとなると、かなり差があつて、ほとんど名だけの同窓会もあると思うんですね。ただ、私の記憶では、農業者大学校ですね。いまは別の形になっ



ていまずけれども、農業者大学校のOBの方は、全国的にも農業経営者のトップクラスとして仕事をされていて、卒業生同士で同窓会的なコミュニケーションをとっておられると思うんですね。埼玉の有機農業の金子美登^{かねこよのり}さんや石川県のおった農産の佛田利弘^{ぶつたとしひろ}さんなど、よく知られている方同士がけっこう繋がっているようなこともあるんですね。

福島大学の食農学類も、卒業後は何らかの形でネットワークが維持できることを考えておくと、有益な情報交換や人的な交流になり得ると思うんですね。なかには海外で活躍する卒業生も出てくるでしょうし、福島県内で活躍する人もいれば、別の県でという人もいると思うので、そのあたりは少し考えておく必要があるかなと感じています。

深山 地域貢献へ、将来的にも繋がってきます。

熊谷 大学で学んだことが、どんな会社で、どんなときに役立ったかということは、こちらが情報をとりに行かないとなかなかわからないんじゃないかなと思います。卒業生にとりにいくべきだと、私も思いますね。

その情報をフィードバックしてもらって、「こういうところが役立った」というのが一つ、二つだと定量的にはならないかもしれないけど、どういうふうにして改善していくかとか、そういうところがよかったかとか、深山先生の話を聞いて考えるべきかなと思いました。

生源寺先生の話を聞いて思ったのは、新潟って、たとえば米菓とか、包装ご飯とか、各食品産業の研究会有るんですね。県の研究員や大学の先生、企業が集まって、年に何回か、みんなで集まって情報交換をする場があるんですね。卒業生がいろいろなところで活躍してきたら、そういうのをやりたりするのもいいかもしれませんね。

【農業者大学校】

1968年に設置された国立の農業者の教育機関。課程は2か年。2012年3月に廃止。

入社1年目から外に出て行って話をしたいとは、なかなか会社はオーケーと言わないと思うんですけども、県なのか大学主導なのかわからないけど、そういう情報交換の場をつくるのもいいのかなと思います。場合によっては、食品産業研究会というような大ぐくりでもいいので、そういうコミュニケーションの場をつくっていくのもいいのかもしれない。

生源寺 そうですね。なるほど。このあたりの話は学類に戻ってからまたしましょう(笑)。

熊谷 承知しました。

深山 今後の課題ですね。

生源寺 そろそろ時間です。今日はいろいろな話をいただきまして、どうもありがとうございます。
(2022年8月22日開催)



性差解析に注目する ジェンダード・イノベーション

2021流行語大賞のトップ10に「ジェンダー平等」が入った。近年の日本ではジェンダーという言葉がかなりポジティブに捉えられているような気がする。1990年代後半から2000年代にかけて起こった「ジェンダーバックラッシュ」(性差別をなくそうとする動きなどに対する反対圧力)の時代にはジェンダーという言葉を使うことさえはばかられたのを考えると何という雲泥の差であろうことか。

しかし、「ジェンダー平等」が流行語としてノミネートされた背景には、元政治家のジェンダー不平等な発言がきっかけなので、我が国ではジェンダー平等への追い風が吹いていると決して喜んではいけない。

とは言え、最近はジェンダーに関連した講演をよく依頼される。特に、2022年4月にお茶の水女子大学が新設した日本初のジェンダード・イノベーション研究所は学術界、政界、産業界、そして一般の方々にも注目されてきている。そもそもジェンダード・イノベーションとは何なのか。「ジェンダー」という言葉は聞いたことがある人は多いと思うが、「ジェンダード」との違いなどについてまずは述べていく。

ジェンダー(gender)とは、生物学的な性別(sex)に対して文化的・社会的につくられた



お茶の水女子大学
理事・副学長
ジェンダード・イノベーション研究所長

石井クンツ昌子

専門は家族社会学、ジェンダー研究。国際比較の視点から家庭内における性別役割分業、男女のワークライフバランス等の研究をしている。

性別のことを指す。ジェンダード (gendered) には「性差を表す」、「ある性に特徴的な」という意味があり、これにイノベーションを付けると「研究開発において性差に着目すること」で、あらゆる性にとつてのより良い技術革新を目指そう」という考え方になる。2005年にジェンダード・イノベーションという概念を広めた米国スタンフォード大学の科学史が専門のロンダ・シービンガー教授は、これまでの研究や開発は男性が担ってきたために無意識のうちに男性を基準として進められ、性差が見過ごされてきたと警鐘を鳴らしてきた。ジェンダード・イノベーションとは、積極的に (sex と gender)、そしてこれらが交差する点に注目して) 性差解析を行い、研究・開発のデザインに組み入れることで「知の再編成」を促してイノベーションを創出することである。

これまでの研究で女性が見過ごされてきたケースは数多くあるが、あえて性差分析を取り入れた事例とそれらの研究成果によりどのような男女差が明らかになり、発明や開発につながっていったのか、研究領域別に紹介する。

1. 薬学・医学関連

性差に敏感な視点を取り入れた研究は薬学や医学分野に多い。それは男性やオスからのみ得られたデータを基に開発された治療方法や薬の効き目に男女差があることがわかったことが主な理由であろう。日本では1990年代に性差医学に関する研究会が発足し、その後、2008年には日本性差医学・医療学会が誕生した。

薬学の分野では、女性やメスは妊娠、出産、性周期があるために、臨床試験において女性



ロンダ・シービンガー
スタンフォード大学教授でジェンダード・イノベーションの創始者。

被験者数が少なく、また動物実験ではオスを使うことが多かった。その結果、米国では既に販売されていた8つの薬が女性の健康上のリスクが高いということで撤退された。広く市販されている睡眠導入剤でも、服用から8時間後に男性は3%、女性は15%が居眠り運転を経験したという結果が得られており、現在では女性の薬を男性の半量にして販売されている。

また九州大学の溝上顕子准教授の研究では、オスマウスにオステオカルシンという骨ホルモンを使うと太る傾向があるが、メスマウスの場合には全く反対で痩せる効果があったという。さらに、世界でトップクラスの学術誌である『Nature』では痛みを生む経路にも性差があることを解明した論文が掲載されており、現在では痛みに関する研究ではオスとメスのマウスを使って研究することが主流となっていて、鎮痛薬の開発にも性差分析結果を取り入れて再検討することが必要とされている。

次に、骨粗しょう症Ⅱ女性というジェンダーバイアスがある。しかし、男性が発症する年齢が女性より10年程度遅いだけで、75歳以上において骨粗しょう症による脱関節骨折の3分の1は男性であり、かつ骨折後の死亡率は男性の方が高いという。よって、男性における骨粗しょう症のリスク評価をみなおす必要がある。同様に乳がんも女性の病気と考えられがちだが、男性も罹る病気である。しかし、乳がんⅡ女性というステレオタイプがあるために、男性の場合はあまり気にかけておらず、そのため発見が遅



骨粗しょう症の例 骨粗しょう症による骨折は、女性に起こる怪我というジェンダーバイアスが存在している。そのため、このように女性がモデルとなっているイラストが多い。



男女別の睡眠導入剤の例 アメリカでは女性の薬の量を男性(10mg)の半量(5mg)にして販売している。また、ボトルの色を分けて男女差を明確にしている。

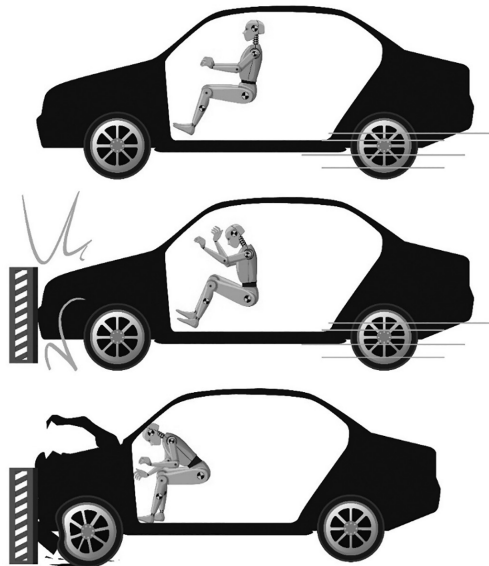
れてしまうケースも多くあるだろう。実際に、乳がんの全生存率は男性で約46%、女性で約60%と男性患者の方が低い。

2. 工学・AI関連

シートベルトの衝突実験には従来男性サイズのダミー人形が使われてきた。そのため、事故が起きた場合、シートベルトの不具合から女性の方が重傷を負う確率が47%高い。また従来の三点式シートベルトは胎児の死亡率を上昇させることがわかっており、胎児の死亡原因の第1位である。よって、女性や妊婦を考慮した衝突実験とシミュレーションによる安全性の確立が急務である。

他にも、男性のデータを基に開発された車椅子は全体的に大きく、特に高齢の女性にとっては使いにくく、そのために事故が起こりやすい。また身近にあるオフィスチェアのほとんどは男性向けであり、背の低い女性にとっては背のサポートが効かないようになっていいる。ロボット工学の分野でも、重い荷物を持ち上げるために製作されたものは男性的な外見、色、声、名前を持つロボットが多く、反対に看護・介護などのケアのために作られたロボットは柔らかな女性的な外見であり優しい声が使われている。

さらに、AIアシスタントに関連した興味深い研究もある。Appleの「SIRI」、Googleの「Google Assistant」、Amazonの「Alexa」、Microsoftの「Cortana」などのAIアシスタン



シートベルトの衝突実験で使われる男性ダミー人形
(designed by Freepik)

トの音声は通常女性である。これは女性の声の方が従順で扱いやすく、人助けをしたがり、頼まれたらすぐに対応するという秘書的なバイアスを助長させると問題視されている。また、AIを用いた人材採用システム上で「女性」や「女子大」という言葉を入力すると評価が低くなるという問題が指摘され、その後、このシステムの使用がストップされたという。

3・都市工学・コミュニティ研究

建築・都市計画にジェンダード・イノベーションの視点を取り入れると、様々な世代の男女に優しいコミュニティを作れるという。その例としては、女性は男性より子どもの送り迎えや買い物のための外出が多いので、この男女の動線の違いから、女性が多く通る道には女性の歩幅を考慮した歩道を作ることが欧米では奨励されている。また、公園を建設する際に、利用者のジェンダー分析を行い、その結果を反映することで多様なニーズに対応した公園を作ったヨーロッパの諸外国の例もある。

性差が見過ごされてきた研究や開発は多岐に渡るが、男女の差を取り入れていくことで、新しい医療、製品、都市づくり、サービスなどにつながるのがジェンダード・イノベーションの目標である。欧米を中心に広がってきたジェンダード・イノベーションの視点であるが、過去10年くらいの海外の動向を見ると、カナダ保健研究機構、欧州委員会、アイルランド研究評議会、米国立衛生研究所、オーストリア科学基金、ドイツ研究財団などの研究助成をする機関においては、助成金の申請に際して性差分析を入れることを必須としている。さら

に、世界トップの学術誌『Nature』『The Lancet』『Cell Press』などでは生物や医学系分野の研究で性差への考慮がない投稿論文については査読プロセスまで進めていない。

日本においてもようやくジェンダード・イノベーションの重要性が認識され始めており、令和2年12月25日に閣議決定された第5次男女共同参画基本計画においては「これまでの男性の視点で行われてきた研究・開発プロセスを見直し、男女の心身の違いやニーズも踏まえ、性差を考慮した研究・技術開発を求める」が含まれている。また、令和3年3月26日に閣議決定された第6期科学技術・イノベーション基本計画では、「研究のダイバーシティの確保やジェンダード・イノベーション創出に向け、指導的立場も含め女性研究者の更なる活躍を進める」ことが盛り込まれている。直近の令和4年の女性版骨太の方針においても、「研究・技術開発に多様な視点を取り入れていくことは、ジェンダード・イノベーションの創出にもつながり、重要である」ことが指摘されている。

お茶の水女子大学のジェンダード・イノベーション研究所では研究・イノベーション・社会発信部門を置き、性差の視点を入れた多様性と包括性を目指した研究と技術開発を開始した。自然・応用科学と社会科学分野を横断した文理融合的な研究から得られた成果の具現化と社会実装を通して未来社会に適合した生活者向けの製品やサービスの提供をすることが目標である。今後は、ジェンダード・イノベーションの視点から様々な研究において性差による違いが明らかになっていくであろう。しかし、社会の多様性は性差だけではなく、世代、社会階層、人種なども含む。よって、産官学連携によりこれらの多様な人々の幸せを実現できる社会の構築へ向けて貢献をしていくことが研究所の究極的な目標である。



イランの新型コロナウイルス感染症パンデミック下における献血の減少

国際医療福祉大学成田看護学部・イラン地域研究 細谷幸子

日本において、輸血に使われる血液製剤は、一般のボランティアから無償で提供された血液から作られています。筆者が研究フィールドとしているイランでも、慈善活動の一つとして献血が普及しています。しかし新型コロナウイルス感染症拡大で献血不足が起こり、血液疾患をもつ患者たちが献血協力を求めて声を上げました。

1. 血液疾患をもつ患者さんたちの献血キャンペーン

私は2014年から、イランのイスファハーンをフィールドとして、サラセミアという遺伝性血液疾患を持つ若者たちの調査をしてきました。サラセミアという病気は日本ではあまり知られていませんが、世界で最も多い遺伝性血液疾患の一つです。

私たちの血液の赤血球には、ヘモグロビンというタンパク質があり、これが酸素を身体中に運んでいます。ヘモグロビンは骨髄で作られるのですが、重症型サラセミアの患者は、生



イスファハーン

イランの首都テヘランから南に約340 kmに位置する、人口約150万人の都市。

まれつき正常なヘモグロビンを作ることができません。そのため、ヘモグロビンを補充するために、子どもの頃から定期的に輸血をして生活しています。

イランには慢性的に重度の貧血を起こす重症型サラセミアの患者が約1万8千人いると報告されています。生まれつき重篤な疾患をもち、継続的に治療を受ける必要があるとはいえ、私がイスファハーンで出会った重症型サラセミアの患者さんたちは、学業やスポーツ、音楽に精を出したり、仕事や家事、子育てに忙しく過ごしたりと、ごく普通の若者と変わりなく生活していました。

しかし、彼ら・彼女らの中には、合併症や随伴症状で免疫力が低い人や、糖尿病でインスリンを使っている人がいます。まさに新型コロナウイルス感染で重症化が懸念される高リスク集団です。

イランは新型コロナウイルスの感染が早期に拡大した国の一つで、2020年のパンデミック初期には医療崩壊の様相を呈し、多くの死者が出ていました。息子や娘のように感じていた彼（女）らのことが心配で、私は日本にいながら、定期的にイスファハーンの患者さんたちとSNSで連絡を取り、健康状態を確認していました。

2020年11月半ばのことでした。数人の患者さんから、「あと5日で輸血用血液がなくなる」とメッセージが来しました。

生きている細胞を含む血液は長期保存ができないので、安定的な血液供給を実現するためには、多くの人が定期的に献血に協力することが不可欠です。しかし、新型コロナウイルスに感染することを恐れて人々が献血に来なくなり、もう血液バンクに血液がないというので



イスファハーンにある世界遺産のイマーム広場

す。その時、イランでは感染者数・死者数が急増していて、週明けから都市間の移動や夜間の外出が制限される予定だと報道されていました。そのような行動制限下で、ボランティアとしておこなう献血が増えるとは思えません。「どうするの？ 政府は何もしてくれないの？」と不安な気持ちで返信しました。

すると、一人の患者さんから「死ぬのを待つだけだよ」と、絵文字付きの冗談めかしたメッセージが返ってきました。生まれた時から病気と共に生きてきた彼（女）たちは、何度もこうした危機を乗り越えてきたのでしょうか。時々、皮肉たっぷりのジョークで、深刻な状況を言い表すことがあります。しかし、実際は冗談で済む話ではありません。体内でヘモグロビンを作ることができない彼（女）たちが輸血をするのは、数年に1度、数ヶ月に1度ということではなく、2〜3週間に1回という頻度です。たとえば、献血量が増えるまで数ヶ月待つということでは間に合いません。輸血をしないと、本当に死んでしまいます。

よくよく話を聞くと、すでに献血キャンペーンが始まっていて、患者さんたちが自分で撮影したビデオレターがSNSで拡散され、2日前から献血に訪れる人の数が増えているということでした。その後、当面の間、血液は足りるようだという知らせがあり、ほっと胸をなでおろしました。患者さんたち自身による献血協力の要請に応じ、多くの人が献血に出向いた結果でした。

2. 無償献血の普及

前述のように、日本において、輸血用血液は、すべて一般のボランティアから無償で提供



されています。かつては売買血も行われていましたが、今は禁止されています。血液という人体由来の医療資源を、市場原理に基づいて有償採血で集めるのか、あるいは人々の自発的な利他行為に期待し、献血を血液供給源とするのかについては、種々の議論がなされてきました。

高所得国で採集される血液の95%は無償献血と言われていますが、国によって状況は異なり、アメリカのように血液製剤の元となる血液を有償採血によって得ている国もあります。また、中・低所得国では、献血で輸血用血液をまかなうことが難しく、事故や病気で輸血が必要になった患者の家族が、自分達で同じ血液型の親族や友人を見つけて病院に連れて行くというようなことも行われています。

WHOの報告によると、日本同様イランでも、国内で使用される輸血用血液はすべて無償の献血から提供されています。しかし、1979年のイラン革命前まで、その供給源は売買血が主流でした。その後、献血が慈善活動の一つとして普及し、血液センターの建設も含めた血液供給システムの整備が進みました。売買血から献血への転換が可能になった背景には、次のような契機がありました。

まず一つが、革命直前の1977年に上映され話題になった「The Cycle」という映画です。この映画は、農村から父親の病気の治療にテヘランにやってきた青年が、薬物依存者や貧困者から安値で買った血液を病院に売る地下ビジネスに巻き込まれていく様を描いており、売買血の倫理を問う議論を呼びました。監督のメフルジュイー氏は、献血キャンペーンのショートフィルムも撮影しており、この映画が、後に無償献血が普及する素地を作ったと言



われています。

さらに、1979年のイラン革命後に始まったイラン・イラク戦争(1980—1988)で、戦傷者のために血液を贈与する行為が宗教的善行として称揚されたという経緯もありました。

イランで献血が広く受け入れられるようになった背景には、もう一つあります。イランに住む人々の大多数はシーア派イスラーム教徒です。シーア派では、預言者ムハンマドの孫にあたる第三代エマーム・ホセインがウマイヤ朝の軍によって惨殺され、殉教した日を弔うアーシューラーの服喪行事を重視しています。イスラーム太陰暦モハッラム月最初の10日間には、男たちが鎖で自らの身体を叩き、エマーム・ホセインの苦境と試練を自らの身体の痛みで追体験する行事がおこなわれます。テヘランなど大都市ではほとんど見られなくなりましたが、以前は流血するほどの自傷パフォーマンスもおこなわれていました。

イランの献血キャンペーンは、アーシューラーの儀礼でエマーム・ホセインのために流す血を献血として捧げ、病気で苦しむ人に分け与えようと訴えかけます。エマーム・ホセインに誓っておこなう願掛けの善行は必ず叶うとも言われていて、イラン人にとって強い説得力を持つ論理です。毎年、アーシューラーの時期と、エマーム・ホセイン殉教後40日目の服喪であるアルバーイーンがある月には、献血量が大きく増加することが知られています。



イラン国家輸血機構クルデスタン州事務局の献血キャンペーンのポスター 下部にはアーシューラーの服喪の行進で男性たちが鎖の束を振り身体を打つ様子が描かれている。

(出所: khabar anlān, <https://khabaronline.ir/x72rz> 2019/October/12)

3. 「他者の善意の上に自分の命がある」

イスファハーンでの調査中、重症型サラセミアの若者たちから何度も、自分たちの命は人々の善意に支えられているという意味合いの言葉を聞いていました。しかし、20代から30代前半の彼（女）らには少し不釣り合いな達観のようにも響くこの言葉の重みを、当時は実感を持って理解していませんでした。コロナパンデミック下で献血者が減少し血液がない、それがよく知る人たちの命を直接的に脅かしているという現実を突きつけられて、初めて、それが漠然とした感謝の表明などではなく、献血者がいなければ生きていけないという実情を反映した表現だったと胸に落ちたのです。

イランのニュースメディアの報道によると、新型コロナウイルスの影響が大きかった過去2年間に比して、2022年の献血量は増加しているということです。

一方、2018年から強化されたアメリカの経済制裁の影響でイランでは物価上昇が続く、人々の生活を直撃していることがわかっていきます。血液供給において、献血者が減り、生活困窮に陥った人々をターゲットにした売買血がふたたび蔓延^{はびこ}るような事態に陥らないことを祈っています。



アーシュラーの行進（テヘラン） 国や地域によっては、男性たちが自らの身体を血しぶきが飛ぶほど打ち付けるアーシュラーの儀礼をおこなうところもある。しかしイランの都市部では、はたきのように見える鎖の束で黒衣の上から上半身をリズムに合わせて叩く程度で、比較的穏やかに行事が進む。

ボランティアという連帯、連帯から生まれる変化 ——ブラジルの事例

1970年、ブラジルのベレン市に「子どもの権利が尊重される社会を創る」を目的に、NGOエマウス共和国運動が設立された。2年後、エマウスは一般市民に生活困難な子どもたちの問題について考えてもらうとともに、団体の活動に対して理解を深めてもらうために、グランジ・コレッタというボランティアのイベントをはじめた。

田村梨花

たむら・りか

上智大学外国語学部 教授
ブラジル地域研究



ブラジルにおける社会運動の歴史

ポルトガルの植民地であったブラジルは、1822年の独立後も長期にわたり人種や社会階層間の不平等性が社会の特徴となってきた国です。20世紀後半から民主主義の定着と社会政策の推進がみられてきましたが、2015年以降の政局不安、コロナ禍の影響などから、貧困はいまだ深刻な社会問題となっています。

一方でブラジルには、社会の不平等性を問題視し、すべての人の尊厳が守られる公正な社会を創るための社会運動が育ってきた歴史があります。

1988年に編纂された初の民主憲法の草案の多くは、市民社会組織によって提案されたものでした。住民が主体となつて社会的課題を解決するアイデアを話し合い、その実現のために政府を動かしていく社会運動の伝統があるからでしょうか、ブラジルにいと「社会のために自分が動く」文化を感じる機会が数多くあります。

「子どもの権利」をテーマに社会に働きかける

1970年、ブラジル北部のベレン市に「エマウス共和国運動」というNGOが生まれました。路上

で働く子どもたちが集まって食事できる場所を創ろうと、地元の若者たちのアイデアから生まれた活動は、自分が抱えている問題について子ども自身が話をし、解決方法をみんなで考える空間に変わっていきます。働く子どもたちが求めていること、それは搾取や暴力のない、子どもの権利が尊重される社会を創ることでした。

「すべての子どもが笑顔で暮らせる社会を創るには、人々がもつこの問題を意識し、かかわりをもつことが重要」ととらえ、1972年にグランジ・コレッタ (Grande Coleta 大収集) というボランティアのイベントを開始しました。一般市民に対し、困難な生活状況にある子どもの問題について考える機会を提供し、エマウスの活動に対し理解を深めてもらうとともに、不用品の寄付を募ることが目的とされました。

集められた不用品は、「手に職をつけたい」という子どもたちの希望によって作られた職業訓練教室の「教材」として活用されることになりました。修理やリメイクが施された不用品は、貧困層の住民に安価で提供されます。その収益は組織の活動維持費になるので、一石六鳥のインパクトを持ちました。

エマウスの創立から50年が経ち、子どもたちのニ

ーズも変化しました。初等教育の就学率は99%で、児童労働は減りましたが、搾取と暴力に苦しむ子どもはいまだ存在しています。

現在のエマウスは、音楽やスポーツなどの文化活動や、社会を創る主体としての子ども・若者の権利について考えるシティズンシップ教育などを通じて、公教育とは異なるコミュニティにおける学びの場を提供しています。

そこでは、子どもの問題意識を原点とし、地域を豊かにするために必要なことは何かを議論し、課題を発見して解決への行動につなげます。いまでは約600人の子どもが訪れる民主主義の実践の空間となっています。

グランジ・コレッタに参加する人々

グランジ・コレッタも、1972年当時の目的が忠実に継続されています。不用品を集めて資金を得るよりも大切なことは、市民に「子どもの権利」について意識してもらうこと。まずその年のテーマが話し合われ、開催の数か月前になるとそのテーマをもとに作られた「開催趣旨&ボランティア募集」のチラシが街中に配られます。

不用品の回収作業は、ベレン市を20のブロックに



トラック満杯の回収物は一瞬で降ろされ、仕分けされる。(2019年、筆者撮影)

分け、約24台もの大型トラックが市街地を巡り、丸一日かけて行なう大規模なレベル。何よりもこのイベントの主役は、700人を超える市民ボランティアです。

回収作業を行なうトラック乗車チーム以外にも、倉庫での物品の荷下ろし要員の手配は必須。冷蔵庫

やガスオーブン、ソファ、テーブルといった大物も多く、運搬作業はかなりの力仕事です。地域の小学校を会場に行なわれるボランティアの事前研修も、イベントへの参加を表面的なものにしないための重要なステップです。

当日の食事を準備する調理スタッフや救急隊の配置も重要な仕事。調理スタッフは地域のおばさたちで、なかには、「1972年から欠かさず参加しているのよ」という重鎮も。いったいどこからこんなに大量の大鍋が？ と私が目を丸くしている間に、山のように積まれたにんじん、玉ねぎ、鶏肉が次々と調理されていく様は爽快です。

コレッタ当日、お揃いのTシャツと帽子を受け取り、気分が上がったところで、その場にいるスタッフ全員で円陣を組み、「今日は丸一日、汗をかくて働くぞ！」という「チーム」としての感覚を共有し、それぞれの持ち場に移動します。

乗車チームは回収、積込の連続でハードですが、トラックの荷台に乗って街の目抜き通りを爆走するため大人気の役回り。風を切って気持ちよく会話をしていたら、荷台に乗っていた人の帽子が飛んでいってしまい、「気に入っていたのに……でも戻れないし、仕方ないね」と話していたところ、バイクに乗った

見知らぬ男性が猛スピードで追いかけてきて、「エマウスの帽子落としただろう！ ほら!!」と満面の笑みで届けてくれた姿には、さすがブラジル……とほっこり。

担当地区の所々で停車し、事前に連絡のあった家を訪ねて、不用品をトラックに積み込む。楽器をゲットしたらサンバを始め、住民の差し入れの冷たい水に喉を潤す。荷台が物資で満杯になったら本部に戻り、物資を降ろす。トラックは次から次へと倉庫に入ってくるので、最速で回収物を降ろし、分別しなければなりません。

汚れや埃だらけのものでもいとわず手に取り、重いものでも黙々と運び、それぞれの物品の保管場所に積み上げていく。そのきびきびとした様子は見惚れるばかり。「やる時はやる」というブラジル人の真骨頂を見る瞬間でもあります。

社会を変える連帯のために

49回目を迎える2022年のテーマは、「連帯は道——世界を変える包摂のために」です。2020年に逝去したエマウスの創設者ブルーノ神父の「連帯以外に道はない」という言葉に、市民の潜在力への期待が込められています。

「子どもの問題を解決することはすべての人の役割」と書かれている「開催趣旨」を手にし、多くの人々がボランティアに集まる理由は、「楽しさ」と「達成感」に違いありません。仲間と汗を流し、数百名が一丸となって同じ目的のために働く。寄付に協力してくれる町中の住民、大通りを走るトラックに向かって手を振ってくれる人々、すべての人が参加者であり、仲間となります。

ボランティアとしてイベントに参加することが、無数の人の「連帯」を紡ぎだし、それは子ども一人ひとりの人生、そして社会そのものを変える力になる。その感覚は間違いなくポジティブなエネルギーで心を満たしてくれます。

エマウスに研修生として赴いた日本人ボランティアの多くが、「人権」「子ども」「アート」「身体」「食と安全」「保健医療」「心理」「教育」「ソーシャルワーク」「多文化共生」「ウェルビーイング」といった多様な分野でその経験を発揮し、社会を創る仕事に携わっていることも、付け加えておきます。

Think globally, act locallyを体現して活躍している仲間について、現地スタッフから、「次はいつブラジルに来るの?!」といつも質問攻めに。国境を超えた連帯は、今も続いています。

【助成施設訪問】 ひだまりの保育園

横浜市鶴見区にある〈ひだまりの保育園〉には総額約50万円を助成。同園は助成金でままごとキッチンセットのほか、レインボーバランスストーンやメッシュトンネルなどの室内運動器具を購入した。

〈ひだまりの保育園〉は、NPO法人鶴見保育の会が設置する小規模認可保育所で、2020年4月に開園した。

同園は、京浜急行本線の京急鶴見駅から徒歩5分のビルの1階にある。横浜市の中心街まで15分あまりの距離だ。通勤途中に寄りやすい利便性の良い立地は、共働きの保護者にとって子育ての負担軽減に役立っている。

しかし、このあたりの賃料は高い。しかも、同園が入る5階建てのビルは、2020年に建てられたばかりの新築ビルだ。とても、小規模認可保育所が入れそうにない。

同園園長の山崎和子さんは〈地域の縁でこのビルに開園できた〉と話す。

「2018年に前職の鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園さんしょうの園長を退職するまで、およそ半世紀にわたって幼稚園で働いてきました。長年鶴見の町で働いてきたことで、地域には多くの知り合いができたんです。三松幼稚園の保護者会会長をされていた縁で知り合ったビルのオーナーさんに、〈山崎さんが保育所を新たに始めるなら〉と声をかけていただいたんです」
それでも、立派なビルの賃料を払っていいのか、不安があったという。そこで市に相談したところ、「居室を認可保育所の仕様にし、賃料補助を受けてはどうか」と提案があった。オーナーさんに建築段階からいろいろな要望を取り入れてもらい、山崎園長が理想とする保

【ひだまりの保育園】

神奈川県横浜市鶴見区。NPO法人鶴見保育の会が設置する小規模認可保育所。0〜2歳の15人が通う（2022年10月現在）。



お話を伺った同法人代表理事で、同園園長の山崎和子さん。

育のしやすい環境が整ったというわけだ。

そうした縁で開園できた同園だが、運動器具や遊具などは十分に整えられない事情もあった。

「今回の助成で購入した運動器具は、雨の日でも、暗くなった夕方の園内でも、天気や時間帯を気にせずに遊べます。遊びの中で自然と体力も身に付きますし、子ども同士のコミュニケーションにも役立っています」

今ではレインボーバランスストーンやメッシュトンネル、スプリングマットなどの運動器具が充実している。それらが今回の助成対象だ。

同園が入るビルその他階には、子ども支援や多文化・多世代の活動拠点づくりをするNPO法人、外国籍の家庭支援を行うNPO法人が入居している。同園は、二つのNPO法人と子ども子育て支援について話し合い、実践・発信している。

「園にいる外国籍の子どものお母さんは日本語が得意ではないので、3階のNPOで外国語の書類作成などをサポートしてもらって助かっています」

また、同園では、〈人との繋がり〉を大事にしている。山崎園長は、「人は人の中でしか人になれません。さまざまな人との関係性を広げて、心身ともにたくましく生きる力を子どもたちに育んでほしいです」



ひだまりの保育園が入るビル 他階には、二つのNPO法人が入居している



レインボーバランスストーンで遊ぶ子どもたち

と話す。

園周辺から駅までの道のりは、鶴見銀座商店街となっていて、人通りも多くとても賑やか。そうした環境を生かして、同園では〈まち保育〉を実践している。〈まち保育〉は、子どもがまちで育つていく土壌づくりのために、まちにあるさまざまな資源を活用していくこと。その一つに、〈人との繋がり〉を広げていく活動がある。

園を訪れた日も、散歩の途中で〈人との繋がり〉が見られた。工事現場の交通誘導員さんに、保育士が「こんにちは！」と声をかけると、それを真似して子どもたちも挨拶する。子どもに声をかけられた誘導員さんは挨拶を返し、自然と笑顔になっていた。

さらに、同園では卒園後の〈繋がり〉も大切にしたいという思いから、鶴見地域に7つの連携園を持つ。日頃から連携園に遊びにいたり、行事に参加させてもらったりして交流を持っており、卒園後の子どもたちの成長も見られるという。

最後に山崎園長は、「子育ての主体は保護者です。それでも今は核家族が増えていて、子育てのモデルとなる人が側にいなかったり、相談できる相手がいなかったりで、子育てしづらい時代になっています。園が保護者たちの実家のような存在になって、子育てに悩む保護者と一緒に地域全体で子どもたちを育てていきたいと思います」と語る。(文 佐藤修久／地人館)



地域を散歩する子どもたち

散歩の途中で電車を見る子どもたち 行き交う人に挨拶したり、まちにある資源を保育に活用することで、〈まち保育〉を実践している。

地域の課題に取り組み、実践的に学ぶ

福島大学食農学類には、県内の9市町村で地域の課題に取り組み「食農実践演習」という授業科目があります。地域の人と一緒に現場の課題に取り組むことで、教室で得た知識も活用しながら実践的に学びます。自分たちの活動を通じて地域の良い変化を感じられ、地域のためになっていることが実感できます。

中川実南

なががわ・みなみ

福島大学食農学類4年



1. 福島大学の食農実践演習

2019年に福島大学に新設された農学群食農学類には、食品科学、農業生産学、生産環境学、農業経営学の4コースがあります。

私は食農学類に1期生として入学し、現在は生産環境学コースに所属して、主に水管理や土壌、森林について学んでいます。

食農学類には食農実践演習という特徴的な授業があります。福島県内の9つの自治体をフィールドとして、2年生後期から1年半かけて地域の課題解決に取り組みます。

食農実践演習では4つのコースの学生がスクラム

を組み、それぞれの地域で活動しています。私は飯館村で活動しました。

2. 飯館村フィールドの活動

(1) 飯館村と原発事故の影響

飯館村は、東京電力福島第一原子力発電所から、北西に直線距離で約40キロ離れています。原発による経済的な恩恵をほとんど受けなかった山間部の村でしたが、事故後の放射線量が高く、全村避難となりました。避難は長期にわたり、20行政区のうち19行政区の避難指示が解除されたのは約6年後、1行政区は今も帰還困難区域です。

2022年9月現在、村内居住者は1507人、その2倍以上の3392人が県内外の避難先にいます。村の人口は大きく減少し、高齢化が進んでいます。

(2) 3つの活動テーマ

飯舘村フィールドの1期生12人は、飯舘村のことを学んで村の課題を見出し、3つのテーマで活動を行いました。

1つ目のテーマは「飯舘村に人を呼ぶ」です。主に若者をターゲットに、SNSを利用した情報発信や集客イベントの企画を行いました。飯舘村の村長が、「若者が関わると村民が元気になる」と言っていたからです。

2つ目は「飯舘村の特産品を作る」です。村に目立つた特産品が少ないことから、村名の付いたジャガイモ品種・イータテビイクに着目しました。成分を分析し、特性を生かしたレシピの提案や情報発信に取り組みました。

3つ目は「飯舘村の農地と周辺環境を守る」です。村の南部に位置する前田・八和木地区（以下、11区）の農業者から、害獣被害に困っていると聞いて、地域のひとと一緒に獣害対策を行いました。

私はこの3つ目のテーマに取り組みました。

3. 取り組んだ獣害対策

(1) 取り組んだきっかけ

飯舘村について学ぶ過程で、11区営農組合の農業者とワークショップを行ったり、私たちの発表に意見をもらったりする機会がありました。その時に多かったのが「サルやイノシシの被害に困っている」という声でした。

特に、サルは有効な対策がなく、深刻な被害を受けていました。獣害対策や野生動物について専門的に学んでいる私たちに何か力になれることがあるのではないかと考えました。

(2) 11区での活動と交流

① 現地調査

最初に、現地の被害や対策の状況を確認しました。11区の水田や畑の周りを獣害対策専門の福島大の教員と見て歩いて、電気柵が正しく設置されているか、野生動物の痕跡があるかなどを確認しました。また、11区営農組合の農業者に、現在実施している対策や今後やってみたい対策、被害状況についての聞き取り調査を行いました。

活動を始めた当初は、世代の違う農業者と活動をうまく継続していけるのかなどの不安もありました。



食農実践演習における現地調査活動の様子 学生たちは、飯館村の農業者から害獣による被害状況や、獣害対策についての聞き取り調査を行った。

しかし、私たちに被害の様子や動物の目撃情報などを詳しく話してくれて、村内の様子を知ってほしいという気持ちが伝わってきました。今思えば、私たちが村の輪に入りやすいように環境を作ってくれていたのでしょう。被害に遭っても前向きに対策を

しようとしている人もいて、私たちも「どうにか力になりたい!」と思う気持ちが強くなりました。

② モデル圃場^{はじょう}の整備

現地調査の結果、電気柵の設置状況に問題が多いことがわかりました。「正しい対策を施した圃場を見本にしたらうと良いのでは」とのアドバイスを教員に受けて、住民の協力を得て、被害の多い地域の圃場を借りて、モデル圃場を整備しました。

森林に囲まれた圃場の周りを、イノシシ対策用のワイヤーメッシュとサル対策用の電気柵を組み合わせた複合柵で囲み、周囲にセンサーカメラを設置して野生動物の動きを観察しました。カメラには圃場側に伸びた木の枝からサルが侵入する様子などが映っていて、これらを参考に対策を改善しました。

③ 農業者向けの勉強会

11区の農業者に呼び掛け、約30人に私たちの活動報告と獣害対策の勉強会を行いました。集会所でスライドを使って解説した後、電気柵や複合柵を設置する際のポイントを整理したチェックリストを配布しました。

その後、モデル圃場に移動して実際の設置状況を



モデル圃場に設置した獣害対策用の複合柵 学生たちはチェック項目に従って複合柵の設置状況を確認し、リストと対策を改善した。

見ながらチェック項目を確認しました。参加者からは質問もたくさん出され、私たちが十分に答えられないと獣害対策の教員が補足してくれました。

多くの人が積極的に参加してくれたことが嬉しく、関心の高さも感じました。同時に、質問の多さは、動物の生態などに基づいて対策を説明する教員を頼

りにしているからだとかわり、専門的な学びが地域の人に役立つことを実感できました。

4. 活動を振り返って

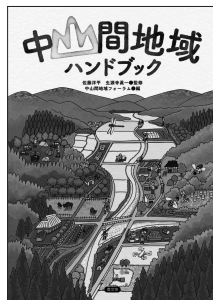
授業で学んだことを実践する過程では苦戦することも多く、どうしたら解決に向かえるか、分かりやすく伝えられるのかを仲間と話し合いながら活動した1年半でした。

勉強会に参加した農業者の反応は、私たちも役に立てたと思わせてくれました。私に「自分が行っている対策はどうして効かないのか」と尋ねてきた男性は、獣害対策に少し疲れている様子でした。もしかしたら営農意欲がなくなっているのかなと思いがら、「電線の間隔が広いと間からサルが入るので、幅を確認してみると良いかも」などと話していると、「じゃあやってみようかな」とやる気になってくれました。

最近では福島県だけでなく、高齢化の進む地域で、学生や若者による地域おこし活動をよく目にするようになりました。地域に入り、活動し、具体的な成果を得ることはとても難しいと思います。しかし、誰かから感謝されたり、地域に良い変化を感じたりすることが、活動の原動力になるのだなと思いました。

BOOK REVIEW

中山間地域ハンドブック



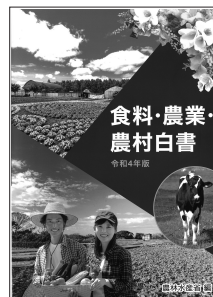
監修＝生源寺眞一ほか
B5判・並製・177頁
定価1800円(税込)
農山漁村文化協会
[目次より]
I 中山間地域とは、その歴史と課題／II データで見る中山間地域／III テーマで見る中山間地域の課題／IV 地域事例に見る中山間の近未来／他

本書でも取り上げた田園回帰や関係人口の流れには、中山間地域と都会とのつながりに加えて、世代間の継承という要素が含まれています。冒頭で大学生や高校生に言及しましたが、これも歴史を未来につなぐ道筋を意識してのことでした。

地域をつなぎ、世代をつなぎ。そのための機会を創出すること。これが中山間地域フォーラムのミッションにほかなりません。本書を世に問うことは、まさにつながりを生むための挑戦だと考えております。

「まえがき」より

令和4年版 食料・農業・農村白書



篇＝農林水産省
新書判・並製・288頁
定価920円(税込)
全国官報販売協同組合
[目次より]
トピックス／第1章 食料の安定供給の確保／第2章 農業の持続的な発展／第3章 農村の振興／第4章 災害からの復旧・復興や防災・減災、国土強靱化等／他

本書は、2020年農林業センサスの公表を踏まえて、「変化する我が国の農業構造」を特集テーマとし、日本の農業構造の中長期的な変化について記述している。冒頭のトピックスでは、「新型コロナウイルスが食料・農業・農村に及ぼした影響」の他、「みどりの食料システム戦略に基づく取組」「農林水産物・食品の輸出額が1兆円突破」「スマート農業・農業のデジタルトランスフォーメーションの推進」などを紹介している。また本書は、日本の食料・農業・農村のさまざまな統計データ記載し、それを知る上で、欠かすことのできない資料となっている。

科学史から消された女性たち 改訂新版

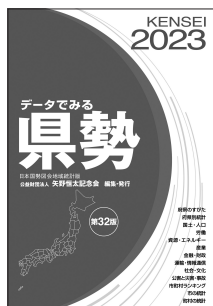


著＝ロンダ・シービンガー
A5判・上製・416頁
定価 3800 円（税別）
工作舎
[目次より]
第1章 制度の概況／第2章 貴族のネットワーク／第3章 手工業的伝統における女性科学者／第4章 女性の伝統／他

研究環境は劇的に変化したが、ほぼ三〇年の時を経て本書はその輝きを失っていない。第3章までの過去の女性研究者の発掘については、新たな情報が付け加わっているにしても、彼女の着眼は古びていない。第4章以降の近代科学と女らしさを巡る相克について、本書を超える仕事は私の知る限り出てきていないようであり、科学とジェンダー研究を志すすべての人にとって、本書は今後も重要な基本文献であり続けることであろう。それどころか、近年注目されている Gender Innovation という新しい概念が、どのような歴史研究、歴史的反省から生まれてきたものなのかを、本書のような科学史書を通して押さえておくことは重要であろう。

（改訂新版への訳者あとがき）より

データでみる県勢2023



発行＝矢野恒太記念会
A5判・並製・512頁
定価 2700 円（税別）

『データでみる県勢』は、『日本国勢図会』の地域版として、地方の社会・経済情勢を明らかにしたデータブックです。第1部「府県のすがた」では、各都道府県の概要を、主要データや人口ピラミッド、リーダーチャートで示すほか、主な生産物などを掲載しました。また、地域の気になる項目に関する解説ページを加えています。第2部「府県別統計」では、国土・人口、労働、産業、財政、社会・文化など8つの章に分けて、都道府県の多様な統計を掲載しました。第3部「市町村統計」では、市町村のさまざまな指標をランキング形式で紹介するほか、全市町村の主要統計をご覧いただけます。さらに、読者の方を対象に、第3部の統計データは矢野恒太記念会ウェブサイトでエクセルファイルを提供しています。本書は電子書籍でも発行しています。

【編集委員】

石井クンツ昌子
猪熊 律子
岩崎えり奈
甲斐 一郎
後藤 春彦
生源寺眞一
盛田 里香
渡辺 秀樹

お茶の水女子大学理事・副学長

読売新聞東京本社編集委員

上智大学教授

東京大学名誉教授

早稲田大学副総長・教授

福島大学教授

第一生命財団常務理事

慶應義塾大学名誉教授

【編集後記】

▼今回の座談会は、2019年に新設された福島大学食農学類の活動を話題の中心に、「農」「食」「地域」について議論いただきました。座談会で司会者は、「最近、福島大学に限らず、農学系の学部をつくる動きがかなり活発に続いている」と語っています。今号の特集が、「農」と「食」に関わる産業や地域の発展のご参考になれば幸いです。

▼今号から「緑と暮らす」の連載を開始しました。各地に取材して豊かな緑を生かした地域づくりを取り上げていく予定です。ご期待ください。

コミュニティ

No.169

……農と食と地域を育てる

2022年11月15日発行（年2回発行）

頒価¥500円

編集・発行 一般財団法人 第一生命財団

〒102-0093 東京都千代田区平河町1-2-10

電話03-3239-2312

制作 地人館（大角 修・佐藤修久）

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

「コミュニティ」誌へのご意見をお聞かせ下さい

ご意見、ご感想等を800字前後にまとめ、当財団へご郵送いただくか、dl-foundation@dream.ocn.ne.jp にお送り下さい。

「読者の声」欄に掲載させていただいた方には、粗品を進呈いたします。

第94号	日・中・韓の家族とコミュニティ	(91.5)	第138号	祭りとコミュニティ	(06.11)
第95号	公共トイレを考える	(91.8)	第139号	団塊世代とコミュニティ	(07.5)
第96号	市民農園	(91.11)	第140号	ミュージアムと地域社会	(07.11)
第97号	現代結婚考	(92.2)	第141号	景観とコミュニティ	(08.5)
第98号	青年会議所	(92.5)	第142号	日本の医療と地域の力	(08.11)
第99号	小学生	(92.8)	第143号	日本の親子の現在地	(09.5)
第100号	★日本のコミュニティ	(92.11)	第144号	地域メディアはコミュニティに何を もたらすのか	(09.11)
第101号	人にやさしいまちづくり	(93.2)	第145号	水辺の環境文化とコミュニティ	(10.5)
第102号	生涯楽集	(93.5)	第146号	多文化共生を考える	(11.5)
第103号	花と暮らし	(93.8)	第147号	東日本大震災～農漁村の復興・再 生・再構築～	(11.11)
第104号	外国人	(93.11)	第148号	若者が見た東日本大震災	(12.5)
第105号	超高層住宅の暮らし	(94.2)	第149号	災害に備える・コミュニティで備 える	(12.11)
第106号	空港とコミュニティ	(94.5)	第150号	出産と育児を支えるコミュニティ	(13.5)
第107号	★祖父母と孫	(94.8)	第151号	地域で担う在宅ケア	(13.11)
第108号	生活と時間	(94.11)	第152号	新しいコミュニティをつくる地域 の文化力	(14.5)
第109号	農村の暮らし	(95.2)	第153号	人口減少社会とコミュニティ	(14.11)
第110号	雨・水・暮らし	(95.5)	第154号	スポーツとコミュニティ	(15.5)
第111号	地震災害とコミュニティ	(95.8)	第155号	農産物直売所の新しい動き	(15.11)
第112号	コミュニティ 30年の歩み	(95.11)	第156号	世代間交流	(16.5)
第113号	都市防災とコミュニティ	(96.2)	第157号	地域の中の保育園	(16.11)
第114号	ペットを考える	(96.5)	第158号	地域の中の男女協働	(17.5)
第115号	女性とコミュニティ	(96.8)	第159号	当事者主体の地域福祉	(17.11)
第116号	大学とコミュニティ	(96.11)	第160号	地域の中のムスリム	(18.5)
第117号	通信メディアとコミュニティ	(97.2)	第161号	土地の歴史とまちづくり	(18.11)
第118号	今後の地域保健の課題	(97.5)	第162号	「平成」から「令和」へ——コミュ ニティはどう変わるか	(19.5)
第119号	都市における死者の弔い	(97.11)	第163号	日本の〈農〉を考える——農業と 地域社会	(19.11)
第120号	家庭科教育と今の社会	(98.2)	第164号	LGBTQ +の現在	(20.5)
第121号	ごみ問題と自治体	(98.5)	第165号	地域医療・看護・介護の現在と将来	(20.11)
第122号	巨大ショッピングセンターと地元 商店街	(98.11)	第166号	水と地域の暮らし	(21.5)
第123号	子ども文庫とコミュニティ	(99.5)	第167号	新型コロナを経た暮らしとコミュニ ティ	(21.11)
第124号	住民によるまちづくり	(99.11)	第168号	多様な人が共存する社会と家族のあ りかた	(22.5)
第125号	高齢社会と交通	(00.5)			
第126号	子どもとコミュニティ	(00.11)			
第127号	ホスピスとコミュニティ	(01.5)			
第128号	サウンドスケープとまちづくり	(01.11)			
第129号	戦後ニュータウンを見直す	(02.5)			
第130号	食生活の変化と家族	(02.11)			
第131号	地域で支える子育て	(03.5)			
第132号	農村地域の自立と住民参加	(03.11)			
第133号	家族はどうなるのか	(04.5)			
第134号	「ご近所」を見直す	(04.11)			
第135号	介護保険と介護予防	(05.5)			
第136号	わかりあえるコミュニティ	(05.11)			
第137号	墓とコミュニティ	(06.5)			

第1号	コミュニティのありかた	(64.5)	第48号	保健・福祉とコミュニティ・オー ガニゼーション	(77.3)
第2号	新しい農村生活	(64.9)	第49号★	企業とコミュニティ	(77.9)
第3号	地域社会と婦人	(64.11)	第50号	人間の居住環境とコミュニティ	(77.11)
第4号	都市生活とコミュニティ	(65.2)	第51号	身のまわりの安全	(78.3)
第5号★	家庭のしつけとコミュニティ	(65.6)	第52号	山村女性の生活変動	(78.5)
第6号★	老人問題とコミュニティ	(65.9)	第53号	近所づきあいのコッ	(78.10)
第7号	コミュニティと青少年	(65.12)	第54号	手づくりの地域文化	(79.3)
第8号	日本人のつきあい	(66.3)	第55号	各国家族の新しい動き	(79.3)
第9号★	家族と親族	(66.8)	第56号	コミュニティと土地利用	(79.10)
第10号	健全な子どもの育成	(66.12)	第57号	川とコミュニティ	(80.1)
第11号★	今日の教育を考える	(67.3)	第58号	日本の高校生・アメリカの高校生	(80.3)
第12号★	レクリエーションとスポーツ	(67.4)	第59号	まちづくりの実験	(80.9)
第13号	健康なまち	(67.7)	第60号	主婦と職業	(81.2)
第14号	交通安全とコミュニティ	(68.1)	第61号★	コミュニティ・センターの評価	(81.3)
第15号	日本人のことばと話し方	(68.3)	第62号	食料問題と農業のゆくえ	(81.10)
第16号	テレビと家庭生活	(68.5)	第63号	コミュニティと生涯教育	(82.1)
第17号	家庭婦人の学習	(68.10)	第64号	コミュニティと生活道路	(82.3)
第18号	公共の場におけるマナー	(69.2)	第65号	新しい地域保健をめざして	(82.10)
第19号	精神衛生	(69.3)	第66号	夫の役割・妻の役割	(83.2)
第20号	ヨーロッパを考える	(69.3)	第67号	健康と食生活	(83.10)
第21号	公衆衛生	(70.2)	第68号	子どもと教育	(83.11)
第22号	千代田地区保健活動10年の総括	(70.3)	第69号	ことばと社会	(84.3)
第23号	創造的農業者	(70.5)	第70号	商店街	(84.3)
第24号	団地生活を考える	(70.8)	第71号	ある漁村社会の移りかわり	(84.6)
第25号	食生活を考える	(70.10)	第72号	集合住宅	(84.11)
第26号	日本人の暮しと住まい	(71.1)	第73号	住みよい暮らし	(85.3)
第27号	地方都市とコミュニティ	(71.4)	第74号	住区と施設	(85.8)
第28号	わがコミュニティ	(71.10)	第75号	昔の主婦と今の主婦	(85.11)
第29号	家族はこれからどうなるか	(71.12)	第76号	東アジアの家族問題	(86.2)
第30号	自然と人間	(72.3)	第77号	少年非行	(86.7)
第31号	子どもの遊び場	(72.5)	第78号	東アジアの地域社会	(86.10)
第32号	コミュニティと広場	(72.7)	第79号★	町内会	(87.2)
第33号	乗物と人間	(72.8)	第80号	日米コミュニケーション考	(88.2)
第34号	ことわざとコミュニティ	(72.10)	第81号	三つ子の魂百まで	(88.3)
第35号	主婦の生活時間	(73.1)	第82号★	ササニシキの村に生きて	(88.4)
第36号	おやじの座を語る	(73.7)	第83号	むらづくり	(88.7)
第37号	社会と健康	(74.1)	第84号	都市化と寿命	(88.11)
第38号	災害とコミュニティ	(74.5)	第85号	国際化と日本語	(89.2)
第39号	日本の青年	(74.6)	第86号	企業と地域社会	(89.5)
第40号★	コミュニティ10年	(75.1)	第87号	都市とお墓	(89.8)
第41号	民話とコミュニティ	(75.2)	第88号	退職者の暮らし	(89.11)
第42号	余暇とコミュニティ	(75.4)	第89号	科学と暮らしー21世紀への展望	(90.2)
第43号	CATVとコミュニティ	(75.10)	第90号	ディズニールランドのまち	(90.5)
第44号	ゴミを語る	(76.3)	第91号★	お年寄りの人間関係	(90.8)
第45号	社会福祉の国際比較	(76.6)	第92号	地方紙の時代	(90.11)
第46号	親族問題の諸相	(76.10)	第93号	お年寄りの使いやすい品物	(91.2)
第47号	わがまちーその財政	(77.1)			

<p>湯沢雍彦（お茶の水女子大学名誉教授）</p> <p>(23)「地域を基盤とした高齢者保健医療福祉サービスの統合のあり方に関する研究」(2008.4) 代表：米林喜男（新潟医療福祉大学副学長）</p> <p>(24)「高流動性社会を背景とした農村への人口流入と新たな『場所性』の構築プロセスに関する研究」(2009.9) 代表：後藤春彦（早稲田大学）</p> <p>(25)「日韓比較からみる青少年の社会化環境」(2011.6) 代表：渡辺秀樹（慶應義塾大学）</p> <p>(26)「地域の特性を生かした子育て支援と保育のあり方の研究—ある地方都市の家庭・地域環境を事例として—」(2011.7) 代表：牧野カツコ（お茶の水女子大学）</p> <p>(27)「長寿社会の地域力と健康—高齢者と介護者の健康に着目して—」(2012.5) 代表：甲斐一郎（東京大学大学院）</p> <p>(28)「農村コミュニティ変貌と資源管理・協同組織—」(2013.11) 代表：生源寺真一（名古屋大学大学院）</p> <p>(29)「法律婚をこえた共同性とケアの実践—事実婚と同棲の事例からみる家族の現在—」(2014.5) 代表：松木洋人（東京福祉大学）</p> <p>(30)「保育・教育方針からみた保育施設の空間・環境の計画に関する研究」(2015.11) 代表：定行まり子（日本女子大学）</p> <p>(31)「男性の育児参加を促進する要因—育児休業取得者へのヒアリングから見えてくること—」(2016.5) 代表：石井クンツ昌子（お茶の水女子大学大学院）</p> <p>(32)「在宅家族介護者を支える地域介護支援ネットワーク醸成に関する研究」(2017.12) 代表：涌井智子（東京都健康長寿医療セン</p>	<p>ター研究所)</p> <p>(33)「子育て・子育ての地域援助システムの研究—ジェネラティビティに関するインタビュー調査から—」(2018.4) 代表：加藤邦子（川口短期大学）</p> <p>(34)「北アフリカにおける福祉とコミュニティー・チュニジアを中心に—」(2020.1) 代表：岩崎えり奈（上智大学）</p> <p>(35)「『はざま』を『あいだ』に組み換える—想像力と配慮による当事者形成のプロセスを考える—」(2021.6) 牧野篤（東京大学）</p> <p>(36)「就学前施設の整備プロセスにおける課題について」(2021.10) 代表：小池孝子（東京家政学院大学）</p> <p>(37)「園における戸外・地域活用の実態と意識に関する調査研究—コロナ前後の変化に注目して—」(2022.5) 代表：宮田まり子（白梅学園大学）</p> <p>*市販はいたしておりませんので、ご希望の方は当財団へ直接お申し込みください（送料実費）。</p>
---	---

「調査研究報告書」 頒価 2,000 円

(1)「浦安市舞浜地域開発の影響調査」
(1989.6)
浦安地域環境研究会（代表：米林喜男）

★(2)「都市化と寿命に関する研究—東京都
と大阪府の比較を中心に—」(1989)
保健医療社会学会研究会（代表：園田恭一）

★(3)「高齢者居住施設の改善方策に関する
検討」(1992.8)
林千代（淑徳短期大学）

★(4)「高齢者が快適に暮らせる社会施設の
条件の調査研究」(1992.11)
商品科学研究所（代表：三枝佐枝子）

(5)「日本人口の高齢化とその要因の変化
—国勢調査結果を中心として—」(1994.5)
山口喜一（東京家政学院大学）

★(6) 育児書内容の国際比較分析—日米英仏
中五ヶ国の育児観— (1994.6)
代表：加藤恭子（上智大学）

★(7)「首都圏におけるマンションライフ—
その快適な住まい方を探る—」(1995.10)
商品科学研究所（代表：藤原房子）

(8)『日本におけるハビタット学会』の経
過と『国際都市理論の展開』(1996.3)
磯村英一（日本ハビタット学会会長）

(9)「戦時女高師卒業者のライフコース—
教育と戦争の影響を中心に—」(1996.3)
湯沢雅彦（お茶の水女子大学）他

(10)「シニア男性のカジュアルウェアの
調査研究—若く活動的に過ごすために—」
(1996.9)
商品科学研究所（代表：藤原房子）

(11)「中山道上州路の庶民信仰と地域社会」
(1996.9)
代表：谷沢明（愛知淑徳大学）

(12)「生涯スポーツの選好に関する研究—
コミュニティと運動文化およびライフコー

スにおける運動選択に関する調査研究報告
書—」(1996.10)
代表：伊藤滋（㈱プレジャー研究所代表取
締役）

(13)「第2回ハビタット会議レポート
(1996年6月 イスタンブール)」(1996.11)
磯村英一編（日本ハビタット学会会長）

(14)「アメリカにおけるエイジングに
ともなう諸問題—第一部 意識調査—」
(1996.11)
加藤恭子（上智大学コミュニティカレッジ
講師）

(15)「アメリカにおけるエイジングにと
もなう諸問題—第二部 経済状態と健康度か
らみた住居選択の中について—」(1997.5)
加藤恭子（上智大学コミュニティカレッジ
講師）

★(16)「食卓の風景—食事マナーの国際比
較—」(1997.8)
加藤恭子（上智大学コミュニティカレッジ
講師他）／比企寿美子（エッセイスト）

★(17)「地域社会におけるマナー意識とマ
ナー行動の研究」(1998.10)
代表：牧野カツコ（お茶の水女子大学）

(18)「養子・里親斡旋問題の再検討と改革
の提言」(1999.3)
代表：湯沢雅彦（郡山女子大学）

(19)「新潟県における大学＝地域交流—国
立と私立の比較分析—」(2000.7)
代表：天野郁夫（国立学校財務センター）

(20)「ボランティア活動と新しいコミュニ
ティ形成の日米比較」(2000.12)
代表：園田恭一（東洋大学）

(21)「補助金とコミュニティ」(2002.3)
加藤秀俊（国際交流基金日本語国際センタ
ー所長）

(22)「家族のゆくえ—むかし・いま・これ
から—」(2008.3)

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された一般財団法人都市のしくみとくらし研究所、一般財団法人地域社会研究所および一般財団法人姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し、発足した一般財団法人です。当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。

【理事長】

斎藤 勝利

第一生命保険株式会社特別顧問

【常務理事】

盛田 里香

（元）第一生命保険株式会社部長

【理事】

青木 和夫

日本大学名誉教授

甲斐 一郎

東京大学名誉教授

後藤 春彦

早稲田大学副総長・教授

定行まり子

日本女子大学教授

陣内 秀信

法政大学特任教授

鈴木 信正

メデイカルスキヤニング東京脊柱側弯症センター長

日端 康雄

慶應義塾大学名誉教授

渡邊光一郎

第一生命保険株式会社取締役会長

渡辺 秀樹

慶應義塾大学名誉教授

【監事】

佐藤 滋

早稲田大学名誉教授

高島 雅博

第一生命保険株式会社常任監査役

【評議員】

秋田喜代美

学習院大学教授

飯田 貴史

第一生命保険株式会社取締役常務執行役員

石井クンツ昌子

お茶の水女子大学理事・副学長

稲垣 精二

第一生命保険株式会社代表取締役社長

大村謙二郎

筑波大学名誉教授

小笠原清基

特定非営利活動法人小笠原流・小笠原教場理事長

南部 雅実

第一生命保険株式会社代表取締役専務執行役員

野原 裕

獨協医科大学名誉教授

服部万里子

服部メデイカル研究所所長

松本 康

大妻女子大学教授

横張 真

東京大学教授

【顧問】

天野 郁夫

東京大学名誉教授

井手 久登

東京大学名誉教授

佐開津典生

東京大学名誉教授

加藤 恭子

仏文学者

加藤 秀俊

（元）日本育英会会長

戸沼 幸市

早稲田大学名誉教授

湯沢 雅彦

お茶の水女子大学名誉教授